

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第188集

のくび
野首第2遺跡（二・三次調査）

東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書63

2010年

宮崎県埋蔵文化財センター



接合資料①



接合資料②

卷頭図版 2



接合資料⑦



接合資料⑤



接合資料⑥



接合資料⑥



SAB 出土遺物



二・三次調査出土黒曜石

序

宮崎県教育委員会では、東九州自動車道（都農～西都間）建設予定地にかかる埋蔵文化財の発掘調査を平成11年度から実施しております。本書は、その発掘調査報告書であります。

本書に掲載した野首第2遺跡（二・三次調査）は、平成19・20年度に発掘調査を行い、後期旧石器時代の遺物をはじめ、縄文時代早期の集石遺構や炉穴などの遺構や遺物、古墳時代の竪穴住居跡などさまざまな遺構や遺物を確認することができました。特に、桑ノ木津留産の黒曜石の原石がまとまって出土したことは、県内で例が少なく、貴重な資料となっております。

ここに報告する内容は、今後、当地域の歴史を解明する上で貴重な資料になるものと考えられます。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、また、埋蔵文化財保護に対する理解の一助になれば幸いです。

最後に、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関・地元の方々に対して、厚くお礼申し上げます。

平成22年2月

宮崎県埋蔵文化財センター
所長 福永展幸

例言

凡例

- 1 本書は平成19～20年度に実施した東九州自動車道(都農～西都間)建設に伴う野首第2遺跡(二次・三次)発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は日本道路公団の依頼により宮崎県教育委員会が調査主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。

なお、日本道路公団は平成17年10月1日より分割民営化され、西日本高速道路株式会社九州支社となった。

- 3 現地での実測・写真撮影の記録は主に田村浩司・黒木秀一・松元一浩・石津晴菜で行った。また、崎田一郎・吉野達三の協力を得た。
- 4 整理作業は埋蔵文化財センターで行った。遺構の図面作成は石津・松元・田村・黒木が行い、遺物実測、浄書、写真撮影等は整理作業員の補助を得て石津が行った。一部の石器実測及びトレースを(株)大成エンジニアリングに委託した。なお、本書で使用した遺物写真は、石津が撮影した。
- 5 次の業務はそれぞれの業者に委託した。

グリッド杭設定

(有) エイユー技研 (19年度)

(有) 黒木測量設計コンサルタント (20年度)

空中写真撮影

(株) スカイサーベイ

- 6 本書で使用した周辺遺跡地図は国土地理院発行の5万分の1図をもとに作成している。
- 7 土層断面及び土器の色調等は農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』による。
- 8 本書の執筆と編集は松本茂・石津が担当した。文責については、二・三次調査の報告は石津、一次調査追加掲載分については松本である。
- 9 出土遺物・その他諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

- 1 遺物・遺構実測図の挿図の基本的な縮尺は次のとおりである。

石器：原寸、1/2

土器：1/3

遺構：1/20 1/40 1/60

- 2 石器実測図の中の記号・表示は以下を示す。
 - ・石器の節理面は一点鎖線で記している。
 - ・後世の剥離は白抜きで示している。
 - ・欠損部分は | | の記号で示している。

本文目次

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1
第3節 遺跡の位置と環境	1

第2章 調査の方法と経過

第1節 調査の方法	4
第2節 基本態序	4
第3節 調査の経過	6
第4節 整理作業の方法	7

第3章 調査の記録

第1節 後期旧石器時代の遺構と遺物	8
第2節 縄文時代の遺構と遺物	44
第3節 古墳時代以降の遺構と遺物	108
第4節 その他の遺構と遺物	108

第4章 調査成果と課題

第1節 縄文時代早期の遺構について	111
第2節 黒曜石の原石について	112

第5章 まとめ

挿図・図版目次

第1図 周辺遺跡位置図	3
第2図 グリッド配置図	5
第3図 基本態序	5
第4図 後期旧石器時代埋部分布図	9～10
第5図 後期旧石器時代①埋部分布図	11
第6図 後期旧石器時代②出土遺物分布図	11
第7図 後期旧石器時代①石器実測図	12
第8図 後期旧石器時代②接合資料1実測図	13
第9図 後期旧石器時代②接合資料2実測図	14
第10図 後期旧石器時代③接合資料3実測図(1)	15
第11図 後期旧石器時代③接合資料3実測図(2)	16
第12図 後期旧石器時代③埋部分布実測図(1)	17
第13図 後期旧石器時代③埋部分布実測図(2)	19
第14図 後期旧石器時代③埋部分布実測図(3)	20
第15図 後期旧石器時代③埋部分布実測図(4)	21
第16図 後期旧石器時代③埋部分布実測図(5)	22
第17図 後期旧石器時代F・H区石器分布図	26
第18図 後期旧石器時代①区石器分布図	27

第19図 後期旧石器時代①石器実測図(1)	28
第20図 後期旧石器時代①石器実測図(2)	29
第21図 後期旧石器時代①石器実測図(3)	30
第22図 後期旧石器時代②接合資料4実測図(1)	31
第23図 後期旧石器時代②接合資料4実測図(2)	32
第24図 後期旧石器時代②接合資料4実測図(3)	33
第25図 後期旧石器時代②接合資料4実測図(4)	34
第26図 後期旧石器時代②接合資料5実測図	35
第27図 後期旧石器時代②接合資料5実測図(1)	36
第28図 後期旧石器時代②接合資料5実測図(2)	37
第29図 後期旧石器時代②接合資料6実測図	38
第30図 後期旧石器時代②接合資料7実測図(1)	39
第31図 後期旧石器時代②接合資料7実測図(2)	40
第32図 後期旧石器時代②接合資料8実測図(1)	41
第33図 後期旧石器時代②接合資料8実測図(2)	42
第34図 後期旧石器時代②接合資料8(3)・黒石刃実測図	43
第35図 縄文時代早期集石遺構分布図	45～46
第36図 縄文時代早期集石遺構(Ⅰ・Ⅱa型)実測図	49
第37図 縄文時代早期集石遺構(Ⅱa・Ⅱb型)実測図	50
第38図 縄文時代早期集石遺構(Ⅱb型)実測図	51
第39図 縄文時代早期集石遺構(Ⅱb・Ⅲa型)実測図	52
第40図 縄文時代早期集石遺構(Ⅲa型)実測図(1)	53
第41図 縄文時代早期集石遺構(Ⅲa型)実測図(2)	54
第42図 縄文時代早期集石遺構(Ⅲa型)実測図(3)	55
第43図 縄文時代早期集石遺構(Ⅲa型)実測図(4)	56
第44図 縄文時代早期集石遺構(Ⅲb型)実測図	57
第45図 縄文時代早期一次調査集石遺構(Ⅰ型)実測図(1)	58
第46図 縄文時代早期一次調査集石遺構(Ⅰ型)実測図(2)	59
第47図 縄文時代早期一次調査集石遺構(Ⅱ型)実測図(1)	60
第48図 縄文時代早期一次調査集石遺構(Ⅱ型)実測図(2)	61
第49図 縄文時代早期一次調査集石遺構(Ⅱb型)実測図(1)	62
第50図 縄文時代早期一次調査集石遺構(Ⅱb型)実測図(2)	63
第51図 縄文時代早期一次調査集石遺構(Ⅱb、Ⅲa型)実測図	64
第52図 縄文時代早期一次調査集石遺構(Ⅲa型)実測図	65
第53図 縄文時代早期一次調査集石遺構(Ⅱb、Ⅲa型)実測図	66
第54図 縄文時代早期一次調査集石遺構(Ⅰ、Ⅱb型)実測図	67
第55図 縄文時代早期砂穴・出土遺物実測図(1)	68
第56図 縄文時代早期砂穴・出土遺物実測図(2)	70
第57図 縄文時代早期砂穴・出土遺物実測図(3)	71
第58図 縄文時代早期砂穴実測図	72

第59回	縄文時代早期伊六・出土遺物実測図(4)	74
第60回	縄文時代早期伊六・出土遺物実測図(5)	75
第61回	縄文時代早期伊六・出土遺物実測図(6)	76
第62回	縄文時代早期伊六・出土遺物実測図(7)	77
第63回	縄文時代早期一次調査伊六実測図(1)	78
第64回	縄文時代早期一次調査伊六実測図(2)	79
第65回	縄文時代早期一次調査伊六実測図(3)	80
第66回	縄文時代早期一次調査伊六実測図(4)	81
第67回	包含層出土縄文土器実測図	83
第68回	縄文時代早期・後・晩期土器(石鏝・石鏝)実測図	88
第69回	縄文時代後・晩期土器(石鏝)実測図(1)	89
第70回	縄文時代後・晩期土器(石鏝)実測図(2)	90
第71回	縄文時代後・晩期土器(石鏝)実測図(3)	91
第72回	縄文時代後・晩期土器(石斧)実測図(1)	92
第73回	縄文時代後・晩期土器(石斧)実測図(2)	93
第74回	縄文時代後・晩期土器(石斧)実測図(3)	94
第75回	縄文時代後・晩期土器(石斧)実測図(4)	95
第76回	縄文時代後・晩期土器(磨石)実測図	96
第77回	縄文時代後・晩期土器(磨石・磨石)実測図	97
第78回	縄文時代後・晩期包含層出土土器(磨石・円盤状石器・台石)実測図	98
第79回	縄文時代後・晩期土器(第1・2部)実測図	101
第80回	縄文時代後・晩期土器(第2部)実測図	102
第81回	縄文時代後・晩期土器(第3部)実測図	103
第82回	縄文時代後・晩期土器(第4部)実測図	104
第83回	縄文時代後・晩期土器(第5部・その他)実測図	105
第84回	縄文時代後・晩期土器(底部1層)実測図	106
第85回	縄文時代後・晩期土器(底部2層)実測図	107
第86回	古墳時代SA 8実測図	109
第87回	SA 8出土遺物・古墳時代以降の遺物実測図	110
第88回	縄文時代陥伏遺物実測図	113
第89回	黒曜石原石出土状況図	115
第90回	F区出土黒曜石原石実測図(1)	116
第91回	F区出土黒曜石原石実測図(2)	117

表目次

第1表	石材分類表	7
第2表	後期旧石器時代石器分類表	23
第3表	縄文時代早期土器分類表	82
第4表	縄文時代後・晩期土器分類表	85
第5表	縄文時代後・晩期土器分類表	100

第6表	後期旧石器時代石器観察表	121
第7表	縄文時代早期土器観察表	126
第8表	縄文時代早期伊六観察表	130
第9表	後期旧石器時代石器計測表	132
第10表	縄文時代後・晩期石器計測表	134
第11表	縄文土器観察表	137
第12表	古墳時代以降遺物土器観察表	141
第13表	黒曜石原石計測表	141

図版目次

巻頭図版1	後期旧石器時代①総合資料	121
巻頭図版2	後期旧石器時代②総合資料	126
巻頭図版3	後期旧石器時代③総合資料	130
巻頭図版4	SA 8出土遺物・二・三次調査出土・黒曜石	134
巻末図版1	後期旧石器時代石器①	143
巻末図版2	後期旧石器時代石器②	144
巻末図版3	後期旧石器時代石器③	145
巻末図版4	後期旧石器時代石器④	146
巻末図版5	後期旧石器時代石器⑤・F区出土黒曜石出土状況	147
巻末図版6	縄文時代早期土器①	148
巻末図版7	縄文時代早期土器②	149
巻末図版8	縄文時代早期伊六①	150
巻末図版9	縄文時代早期伊六②	151
巻末図版10	縄文時代早期伊六③・集石遺構	152
巻末図版11	縄文時代早期伊六④・SA 8遺物出土状況	153
巻末図版12	SA 8出土遺物状況・完備状況	154
巻末図版13	後期旧石器時代石器	155
巻末図版14	縄文時代早期土器①	156
巻末図版15	縄文時代早期土器②	157
巻末図版16	縄文時代後・晩期土器①	158
巻末図版17	縄文時代後・晩期土器②	159
巻末図版18	縄文時代後・晩期土器③	160
巻末図版19	縄文時代後・晩期土器④	161
巻末図版20	縄文時代後・晩期土器⑤	162
巻末図版21	縄文時代後・晩期土器⑥・石器(石鏝)	163
巻末図版22	縄文時代後・晩期土器(石鏝・石斧)	164
巻末図版23	縄文時代後・晩期土器(磨石・磨石・円盤状石器・台石)	165
巻末図版24	SA 8出土遺物・1区包含層出土遺物	166

第I章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

東九州自動車道の延岡～清武間は平成元年2月に基本計画が決定し、これを受けて宮崎県教育委員会（以下県教委）では予想されるルート周辺の分布調査を実施し、多くの遺跡が確認された。その一区間である都農～西都間は、平成9年12月に施行命令が出され、これに伴い平成年度に県教委が路線上の分布調査を行った結果、計79箇所、約896,000㎡に及ぶ遺跡の存在が推定された。そこで県教委では、平成11年度から日本道路公団の委託を受け東九州自動車道（都農～西都間）の建設工事で影響を受ける遺跡の発掘調査を実施し、記録保存の措置をとることとなった。

野首第2遺跡の確認調査は平成12年9月28日から同年10月13日にかけておこなわれ、これを受けた一次調査が平成13年5月7日から平成16年3月29日までおこなわれた。町道の付け替えと側道設置に伴い、平成19年7月18日～同年12月28日に二次調査をおこない、平成20年1月28日から平成20年4月31日まで三次調査をおこなった。

なお整理作業については、二次調査で出土した遺物の一部は三次調査の用地買収の進捗を考慮し、平行して整理作業をおこない、三次調査が終了した段階で本格的な整理作業を開始している。

第2節 調査の組織

野首第2遺跡（二次・三次）発掘調査・整理作業の組織は次のとおりである。

調査主体

宮崎県教育委員会
宮崎県埋蔵文化財センター
(平成19年度 二・三次調査)

所長	清野 勉
副所長	加藤 悟郎
総務課長	宮越 尊
主幹兼総務担当リーダー	高山 正信
調査第一課長	長津 宗重
副主幹兼調査第一担当リーダー	南中道 隆

調査担当

調査第一担当	主 査	田村 浩司
	主 査	黒木 秀一
	主 事	松元 一浩
	主 事	石津 晴菜 (主任)

整理担当

調査第一担当	主 事	石津 晴菜
--------	-----	-------

(平成20年度 三次調査)

所長	福永 展幸
副所長	加藤 悟郎
副所長兼総務課長	長友 英詞
主幹兼総務担当リーダー	高山 正信
調査第一課長	長津 宗重
副主幹兼調査第一担当リーダー	南中道 隆

調査担当

調査第一担当	主 査	黒木 秀一
	主 事	松元 一浩
		(主任)
	主 事	石津 晴菜

整理担当

調査第一担当	主 事	石津 晴菜
--------	-----	-------

(平成21年度)

所長	福永 展幸
副所長兼総務課長	長友 英詞
主幹兼総務担当リーダー	高山 正信
調査第一課長	長津 宗重
副主幹兼調査第一担当リーダー	飯田 博之

整理担当

調査第一担当	主任主事	松本 茂
	主 事	石津 晴菜

第3節 遺跡の位置と環境

立地

野首第2遺跡は、高鍋町大字上江字青木に位置している(第1図)。高鍋町は宮崎平野に包摂され、東に日向灘を望み、北には川南原台地、南は水原台地、西には茶臼原台地、北西に尾鈴山を眺めることができる。

遺跡は小丸川を北東に望む舌状台地に展開する緩斜面状に立地し、標高は約35m前後を測る。

I区北側は谷地形(野首第1遺跡)となっており、湧水が確認されている。同じくC区南側にも湧水が認められ、恵まれた水利環境であり、狩猟場や集落として利用される絶好の場であったといえる。

歴史的環境

本遺跡では後期旧石器時代から現代にかけての、遺構・遺物が確認されており、周辺にも多くの遺跡が存在している。以下では簡単に、時代ごとの概略を述べる。

【旧石器時代】

後期旧石器時代の遺跡数は東九州自動車道建設に伴う発掘調査により、急増している。主な遺跡には持田中尾遺跡(文献1)、北牛牧第1遺跡、牛牧原遺跡(文献2)などがある。

【縄文時代】

縄文時代の主な遺跡は、早期では、崩戸遺跡(文献3)や老瀬坂上第3遺跡(文献4)、野首第1遺跡(文献5)などがあり、集石遺構・炉穴を中心に、数多くの遺構・遺物が確認されている。

集石遺構に関しては、本遺跡を含めると400基近く確認されている。また、近年の調査で小丸川をはさんで対岸の川南町にも、尾花坂上遺跡(文献6)、尾花A遺跡(文献7)などを中心に集石遺構が高密度に構築されていることがわかっている。前期以降の遺跡数は、早期に比べると格段に少なくなるが、前期では、野首第1遺跡(県道、文献7)、崩戸遺跡などがあり、轟B式などの土器が集中して出土していることや、中期では下耳切第3遺跡(文献8)、後期では野首第2遺跡(一次調査、文献9)で集落が確認されている。

【弥生時代】

弥生時代は中期後半～後期にかけては集落の展開が

多く認められるが、それ以前の前期～中期前半にかけての集落は希薄である。その中でも、松葉里型住居に類似した住居跡が検出された持田中尾遺跡や、大戸ノ口第2遺跡(文献10)は希少な例である。中期～後期前半の集落では牛牧原遺跡、後期のものとしては、野首第1遺跡がある。

【古墳時代】

古墳時代の遺跡としては、古墳群や集落がいくつか確認されている。野首第2遺跡の周辺には前方後円墳1基・円墳11基確認されている山王山古墳群、牛牧古墳群などがある。

後期以降の古墳群では、横穴式石室を主体部に持つ古墳が2基確認されている野首古墳群、老瀬横穴墓群などがあり、野首第1遺跡では古墳時代中期後半～後期初頭、後期後半～終末期にかけての集落跡が確認されている。また、下耳切第3遺跡(文献11)でも古墳と隣接するような後期以降の集落が展開する。

【古代】

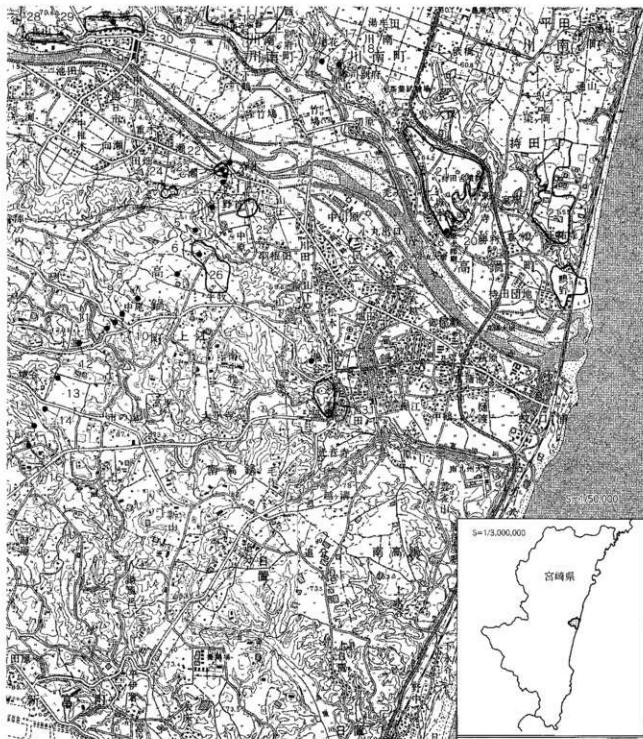
周辺で古代に該当する遺跡は少ないが、野首第2遺跡(一次調査)で布目瓦や緑釉陶器が、下耳切第3遺跡では円面硯、老瀬坂上第3遺跡では8世紀～9世紀初頭のものとなる蔵骨器、8世紀中頃～後半にかけての須恵器高台付椀の蓋の転用硯が出土しており、8世紀前半頃の火葬墓も確認されている。

【中世～近世】

老瀬坂上第2遺跡では土塁と空堀が確認されており、天正6(1578)年の高城・耳川合戦時における島津以久の陣跡と推測されている。また、崩戸遺跡からは掘立柱建物跡、土坑墓などが、野首第1遺跡でも掘立柱建物跡や石塔群が確認されている。

【近代～現代】

太平洋戦争終盤にあたる1945年には高鍋に護路部隊が配備され、下耳切第3遺跡、老瀬坂上第3遺跡、近辺の山中に機関銃座や砲台を構築し、海岸からの米軍侵入に備えていた。それに関連する遺物としては、南中原第2遺跡(一・二次、文献12・13)では太平洋戦争中のものである認識表、銃剣が出土している。また、周辺の畑から陶器製の不発弾が見つかったという話も聞くことができ、上江一帯は戦争の爪痕を残す地域であることがわかる。



1. 野首第2遺跡 2. 崩戸遺跡 3. 野首第1遺跡 4. 南中原第1遺跡 5. 老瀬板上第3遺跡 6. 下耳切第3遺跡
 7. 北牛牧第5遺跡 8. 唐木戸第1遺跡 9. 唐木戸第2遺跡 10. 唐木戸第3遺跡 11. 唐木戸第4遺跡 12. 小並第1遺跡
 13. 牧内第1遺跡 14. 牧内第2遺跡 15. 音明寺第1遺跡 16. 音明寺第2遺跡 17. 尾花A遺跡 18. 尾花板上遺跡
 19. 川南古墳群 20. 持田中尾遺跡 21. 持田古墳群 22. 野首第1遺跡(2004年報告地区) 23. 野首古墳群 24. 老瀬横穴墓群
 25. 山王古墳群 26. 牛牧古墳群 27. 大戸ノ口第2遺跡 28. 木城村古墳群 29. 永山古墳 30. 高城跡 31. 高鍋城跡

第1図 周辺遺跡位置図

第Ⅱ章 調査の方法と経過

第1節 調査の方法

調査区の名称

一次調査で全調査区をA～E区に分けて発掘調査をおこなっているので、二次調査では遺物の取り上げ番号や遺構番号の混同を避けるため、北からF・G・H区と付け、さらに三次調査の調査区をI区とした。I区は樹木植栽により削平された「削平部分」と削平を受けていない「残存部」に分かれる。

グリッド設定

一次調査で全調査区を24×13の10mグリッドに分割し、南北にアルファベット、東西に番号をふっている。ただし、一次調査の北限がAとなっている。そのため、さらに北に位置する三次調査区であるI区に関してはAより北側をAア、AA…としている(第2図)。

遺物の取上げ

遺物の取上げは後期旧石器時代(IVb層以下)の遺物に関してはすべてトータルステーションによる取上げをおこなっている。

その他、I層中から出土したものに関してはグリッド区画に従い取上げを行っている。

礫群の認定と礫の取上げ

一次調査の認定基準に即して、旧石器時代の遺物包含層に人為的に搬入されたもので明確なまとまりをもつものを「礫群」としている。

礫の取上げに関しては、一定範囲(1～2m程度)でまとまりをもつものは遺構番号(Sから始まる番号)をつけ平面図を作成し、レベルで高さを記録している。その後、礫に番号をつけて取上げを行っている。

ただし、まとまりをもたない礫についてはトータルステーションによる取上げを行っており、取り上げ後、礫群の構成礫として認定されなかったものについては、自然礫として廃棄している。

調査区、遺構の記録

遺構実測は集石遺構や、礫群、炉穴の個別図と、土層断面図に関しては、手測りによる実測を行っている。

多数検出しているピットや一部の土坑・炉穴、調査区境界線に関しては、トータルステーションで測点を

記録後、図面におこしている。

第2節 基本層序

野首第2遺跡では、一次調査の結果より、計6時代、細分時期では15以上の時間幅にわたって、遺構・遺物が確認されている。

二次・三次調査では調査区の大半が一次調査区と接していたため、一次調査の基本層序(第3図)にしたがって調査をおこなっている。

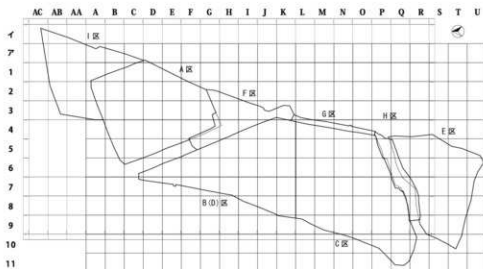
ただし、二次調査区のH区は道路部分であったため、I層～IVa層はほとんど削平を受けていた。よって遺構検出はIVb層から行っている。

また、三次調査区のI区の大半は、樹木植栽を行う以前から畑地や植林によって、大幅な削平を受けていたため、表土を剥ぐとすぐにVI～VII層が露出する状態であった。

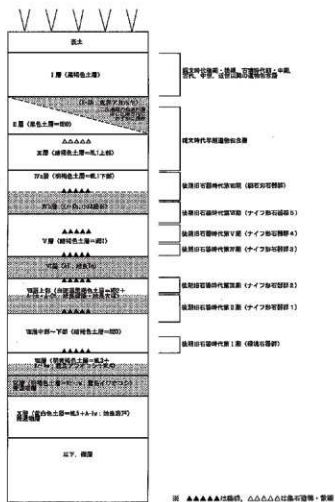
縄文時代後・晩期の遺物包含層であるI層はF区でのみ確認できている。このI層に関しては、以下のことが確認できる。①J9グリッド付近から南東方向に傾斜している。②全調査区において、K-Ah(鬼界アカホヤ火山灰)の堆積がほとんど確認できない。C区南端部に二次堆積が見られるのとピットの埋土にわずかに確認できるものはあるが、堅穴住居跡の埋土中には確認できない。③I層下面が不整合堆積を呈する。I層直下と接する基本土層が場所ごとに異なる(平面で分層できる状態)。なおI層下部に縄文時代後・晩期の遺物が包含されている。このことから、遺物の上限時期である縄文時代後期以降から現代に至るまでの間に、本来、現状で確認できるよりも傾斜が急であった旧地形が侵食・削平するような作用が及ぼされた可能性が指摘されている(文献9)。

これを一次調査では、「土壌消失現象」と称し、人為的な作用なのか、自然現状なのか検討を行っている。しかし、どちらなのかは判然とせず、二・三次調査でもそれを解決するようなものは確認できていない。

また、不整合堆積が顕著に確認できるC区に隣接するH区では、道路除去後、C区でみられた不整合堆積と同様に平面で分層できる状況が一部確認できた。



第2図 グリッド配置図 (S=1/2000)



第3図 基本層序

第3節 調査の経過

二次・三次調査の日誌抄

(平成19年度)

- 7月17日(火) 二次調査開始。
30日(月) 事務所等撤去。
31日(火) F・H区の町道部分アスファルト撤去。
- 8月 1日(水) アスファルト撤去2日目。
H区で集石遺構見つかる。
2日(木) 台風13号接近。
6日(月) F・G区表土剥ぎ開始。
9日(木) 作業員33名雇用開始。
10日(金) 作業員16名雇用開始。
16日(月) 掘削開始。
21日(火) F区にI層に似た表土が堆積していることが判明。
29日(水) F区のI層中から多量の石斧と石錘、縄文土器片出土。
- 9月 4日(火) G区で遺構検出開始。
集石遺構2基検出。
10日(月) F区H区遺構検出開始。集石遺構1基検出。
14日(金) 台風14号接近。
20日(木) 一次調査で確認されていた古墳時代の竪穴住居跡の残りを検出。
H区で散礫検出。
27日(木) 空中撮影。
- 10月 3日(水) G・H区IV層以下の掘削を開始する。
5日(金) 台風15号接近。
9日(火) F・H区ともにIVb層で竪穴検出。
11日(木) H区で礫群検出。
竪穴が見つかり始める。
- ※11月末でH区とG区の一部を引き渡すことになったため、10月よりほとんどの作業員をG区とH区の掘削に専念。
- 11月 1日(木) G・H区ともにVI層掘削。遺物が出土しない日々が続く。
14日(水) H区調査終了。F・G区に作業員を配置。
26日(月) G・H区の一部安全柵、器材庫撤去。
水道管設置に伴う確認調査開始。
29日(木) 確認調査部分谷になっており、I層がかなり厚

く堆積。遺構は確認できず。遺物回収を行い調査終了。

- 12月 5日(水) 黒曜石原石のみが集中して見つかる。
10日(月) 作業道になっていた部分の掘削をおこない、最後の竪穴検出。
13日(木) VI層(A・T層)掘削用トレンチ設定。
掘削開始。
19日(水) VI層以下で遺物出土せず。調査を終了。
20日(木) 道具片付け。
27日(木) 器材撤収。
28日(金) 事務所撤去完了。
- 1月29日(火) 三次調査区草刈り。
30日(水) 一部表土剥ぎ開始。
- 2月 4日(月) 作業員10名雇用開始。
集石遺構、竪穴数基検出。
18日(月) 作業員20名雇用開始。
20日(水) 別契約部分の表土剥ぎ。
土層確認のためトレンチを入れる。その結果、樹木植栽部分はほとんどが無遺物層と判明。
21日(木) 竪穴2基検出。
22日(金) VII層上面で遺物が出土し始める。
29日(金) 樹木植栽部分表土剥ぎ。
- 3月14日(金) 樹木植栽部分トレンチ調査開始。
19日(水) 19年度調査終了。

(平成20年度)

- 4月 8日(火) 20年度調査開始。
作業員10名雇用開始。
VI層以下トレンチ調査。遺物取り上げ。
礫群実測。
21日(月) 調査区全景写真撮影。
24日(木) 安全柵撤去。
30日(水) 器材撤収、事務所撤去完了。
三次調査終了。

第4節 整理作業の方法

石器の接合について

石器の接合に関しては、二・三次調査区の大半が一次調査区と接しているため、今回調査した範囲だけではなく、一次調査出土資料との接合関係を検討していく必要があった。

手順としては、最初に今回調査分の各調査出土の石器の石材分類を行っている。分類は一次調査の報告の際使用されたものを参考としており、石材については、石材分類表(第1表)に記している。

次に接合関係を検討するのだが、接合にあたり、一

次調査分の資料が膨大にあるため、今回接合する対象を次のように絞っている。

- ① 二・三次調査区の近隣区で出土した同一石材
- ② 「母岩」が確定している資料
- ③ 遠方区で出土した同一石材

これらを対象に一次調査分の資料と今回調査分の資料の接合関係の検討を行っている。

接合の大まかな手順は、①→②→③の順番である。

二・三次調査区出土の石器は特にH区で集中して出土しており、他の区の出土は少量である。そのため、まずH区とC区・E区との接合関係を検討し、それからB区、A区と接合の対象区を広げている。

		<p>O₀区 島ノ木遺跡・土巻土器産地とする可能性がある一群</p> <p>a 透光下ではやや中性色から黒色にみえる。透光性は高く、強い光沢を持つ。白色の不純物を含む。自然風乾らざつた平ら断面から構成される。</p> <p>b aと共通する特徴をもつが、発色状況や形状の細線模様が異なる。</p> <p>c aと共通する特徴を持つが反色。O₀区群と類似。</p> <p>O₁区群 「黒色黒色帯の石」など。黒色。黒色帯が黒い。自然風乾らざつた断面などから構成される可能性のある一群。</p> <p>a 透光下ではやや中性色から黒色にみえる。透光性は高く、強い光沢を持つ。黄白色の不純物を多量に、または多く含む。自然風乾らざつた断面に磨きさらしほしほ不規則な割れを起す。透明度の可能性高い。</p> <p>b 透光性に乏しいが光沢は強い。黒色帯が主で、線模様が目立つものもある。黄白色の不純物を多く含む。自然風乾らざつた断面が多くなる。注意度の可能性高い。</p> <p>c aと共通する特徴をもつが反色または黄白色の線模様を持つ。</p> <p>d 黒色帯に反色の線模様が入る。反色の不純物を隔りに含む。透光性に乏しく、わずかに光を透す部分に黒色帯。</p> <p>e 黒色帯に黄色の不純物を隔りに含む。透光性はほとんどないが、わずかに光を透す部分に黄白色の線が走る。</p> <p>O₂区群 「黒色、天然風乾らざつた石」に類似する一群。</p> <p>a 黒色で透光性が強く、黒から反色の線模様が見える。不純物をほとんど含まず黒色。</p> <p>b 黒色で透光性はほとんどなく、キラつく光沢をもつ。不純物をわずかに含む。</p> <p>c 深黒色で透光性はまったくない。</p> <p>d 反色で不純物をわずかに含む。黒色。</p> <p>O₃区群 「大部分黒色の可能性が高い一群」。</p> <p>a 黒色で、透光性が高い。</p> <p>b 反黒色でaに比べ透光性に乏しい。</p> <p>c 反白色で透光性に乏しい。</p> <p>O₄区群 「I区以外の黒曜石」</p>
黒曜石 (O ₀)		
火成岩系		
		<p>奥前山産流紋岩類 (O₅-T₀) よく引きのびた白い白から反色にかけての本質レンズが観察される。線状石目が多く使用される。</p> <p>A₀区群 西米九州地方の黒曜岩類(アサカイト)に類似する一群。</p> <p>A₁区群 大部分黒色と見えられ一群。</p> <p>A₂区群 黒色に黄白色を帯びた一群。</p> <p>A₃区群 その他の特徴を有する一群。</p> <p>R₁区群 新羅風気味の灰。流理構造は明確ではない。新鮮な面は黒色から黒色で磨き、黄々黒川流域の引石磨神代石磨神代に多用される石材と同様。</p> <p>a 黒化する。黄白色から反白色。</p> <p>b 黒化する。aと色調は異なるが、反白色部分が強い。</p> <p>c 黒化率がa、bに比べ高く黄白色。鉄分含量がばらばら。</p> <p>R₂区群 「普通黒化はあるが、流理構造は比較的明確である。新鮮な面は黒色から黒色」。</p> <p>a 黄白色から黄白色。黄々黒川流域の可能性高い。</p> <p>b 黒化率から線模様。</p> <p>R₃区群 中や次流のある黒色または黒く反色を帯び、反から反白色の流理構造がみられる。黒化率は高まる。流理構造が強く出る場合もある。新鮮な面は黒色から黒色で磨き。</p> <p>a やや光沢のある黒色。</p> <p>b ほとんど反白色。</p> <p>R₄区群 「I区以外の黒曜石」に類似する一群。</p> <p>H₀区群 粉性で強く黒化。黄白色から黄白色あるいは反色。線状石目が強い。</p> <p>a 黒色から黄白色。</p> <p>b 反色から線模様。</p> <p>H₁区群 中や風化した表面に黒化が明確な点やまたは線状にはいる。反色から線模様。</p> <p>H₂区群 中や風化した表面で点状に黒化が観察されない。</p>
奥前山産流紋岩類 (O ₅ -T ₀)		
安山岩 (A ₀ -A ₃)		
流紋岩 (R ₁ -R ₄)		
変成岩系		
		<p>樽巻岩類ホルンフェルス (H₀-H₂)</p> <p>a 黒化率から線模様。</p> <p>b 反色から線模様。</p> <p>H₀区群 中や風化した表面に黒化が明確な点やまたは線状にはいる。反色から線模様。</p> <p>H₁区群 中や風化した表面で点状に黒化が観察されない。</p>
樽巻岩類ホルンフェルス (H ₀ -H ₂)		
流紋岩 (R ₁ -R ₄)		
堆積岩系		
		<p>S₀区群 流理構造から黒色帯に黄白色が入る。</p> <p>S₁区群 黒色帯を多量に含む。線に反色帯が見える。中や強い。</p> <p>S₂区群 線模様から黒色帯。線模様が明確なものから線からなる流理でガラス質に包みこまれたり黒化がある。</p> <p>S₃区群 黒化は進まず黒色から反白色。</p> <p>S₄区群 ホルンフェルス化した黒化が弱い反色から反白色。</p> <p>S₅区群 「I区以外の黒曜石」に類似する一群。</p> <p>砂岩</p> <p>S₆区群 粗粒で均質。反白色または黄白色から黄白色。</p> <p>S₇区群 「I区以外の黒曜石」に類似する一群。黄白色から反白色。</p> <p>S₈区群 「I区以外の黒曜石」に類似する一群。黄白色から反白色。</p> <p>チャート (C₀-C₂)</p> <p>C₀区群 従来のチャート</p> <p>C₁区群 光沢がなくなったもの</p> <p>緑色珪岩類 (G₀-G₂) 緑色珪岩チャートに似るがより光沢が強い。反色に似る。線から線模様。</p> <p>G₁区群 黒化率から反白色。線模様が明確なものから。線からなる流理でガラス質に包みこまれたり黒化がある。</p> <p>G₂区群 その他。成り不明の珪岩。</p>
流紋岩 (R ₁ -R ₄)		
堆積岩系		
砂岩		
チャート (C ₀ -C ₂)		
緑色珪岩類 (G ₀ -G ₂)		
成り不明		

第1表 石材分類表

第三章 調査の記録

第1節 後期旧石器時代の遺構と遺物

二・三次調査では始良T n 火山灰下位のⅦ層上～下部、Ⅴ層、Ⅳb層に遺構と遺物の集中が見られる。一次調査の報告の中で、後期旧石器時代の時期区分は第Ⅰ～Ⅶ期と設定されているが、二次・三次調査では、ツールの出土が極めて少ないことから、一次調査の詳細な時期区分との対応が難しい。そのため、今回調査報告は始良T n 火山灰の下位を後期旧石器時代①、上位を後期旧石器時代②の2時期に分けるにとどめる。

後期旧石器時代①の遺構と遺物

Ⅶ層上～中部にかけて遺構・遺物が確認されている。

一次調査（第4図）ではⅦ層下部からⅧ層上部にかけて剥片・石核などが数十点確認されている。

しかし二・三次調査ではⅦ層中部が出土位置の最深であり、下部では遺構・遺物は確認されていない。

【礫群】（第5図）

H区で1基、I区で6基の計7基を礫群として認定している（第4図）。礫群の認定基準については、第Ⅱ章で挙げたとおりである。検出層位はⅦ層上部から中・下部にかけてである。概要の記述がないものは、観察表を参照されたい（第6表）。

29号礫群

拳大の礫が比較的多くまとって出土している。赤化が認められる礫は少ないが、破砕礫がみられる。

30号礫群

礫が少ないが、まとまりをもつ礫群である。礫の赤化・破砕ともに見られない。

28号礫群

赤化・破砕した礫はほとんど無く、小ぶりの円礫が目立つことで他の礫群とは異なる印象を受ける。周りに同様の礫が確認できないことや、礫層の礫とは様相が異なることから、人為的に持ちこまれた礫のまとまりであると判断し、礫群としている。

以上が検出礫群の概要である。これらの礫群は、礫の個数が少なく、密集度も低い傾向にあることや、A区に集中するといった分布の様子、Ⅶ層上部～下部が検出層であることを含め検討すると、これらは一次調

査でいう、後期旧石器時代第Ⅱ・Ⅲ期の礫群であると推定できる。

【遺物】

二・三次調査におけるⅦ層以下の出土遺物は、I区でのみで確認できている。ただし、樹木植栽部分が大きく、ほとんどⅧ層まで削平を受けていたためI区での遺物の出土範囲は狭い。範囲は、A区との北側調査区境目と残存部の一部である（第6図）。器種分類は一次調査の分類に準ずる。

【剥片・二次加工剥片】（第7図）

1は、S S h I群の剥片を素材とする二次加工剥片である。左側縁と右側縁上半に細かな剥離が見られる。2・4・6・7は、珪質頁岩の剥片である。2は、小型の石刃で加工は施されていない。4は、S S h III群を素材とするL字状にカーブした石刃である。

5は、S S h II群を素材とし、縦長剥片の両側縁に剥離を施す削器である。右側縁の剥離が細かく、左側縁は、剥離は少ない。3は、成因不明石材の剥片である。自然面を残している。8はR y II群の剥片である。6は、H o II群を素材とし、左側縁に粗い剥離を施した二次加工剥片である。10は、ボジ面をもつ剥片素材石核である。

【原石】

Ⅶ層上部から、珪質頁岩の原石も出土している。大きさは、拳よりやや小さい。一次調査では、同様の礫を敲石と報告しているが、剥離・敲打ともに見られないため、原石としている。

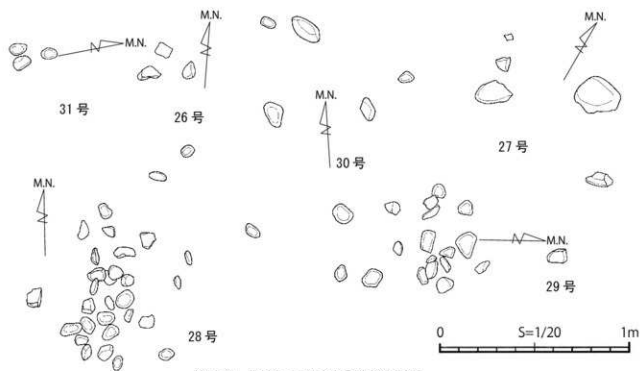
【接合資料】（第7～10図）

接合資料1（二次①-1、第8図）

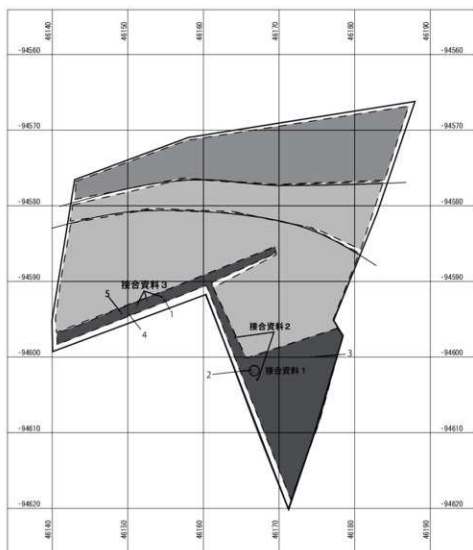
11は、5点の剥片が接合している。すべてⅦ層上部で出土している。礫面はすべて除去された後、さらに剥片剥離をおこなっているため、全体の形状が把握できない。石材は、S S h II群である。

接合資料2（二次①-2、第9図）

17は石核と石刃2点から成る接合資料である。Ⅶ層中部から出土している。全体が把握できないが、亜円礫の一部であることが推定できる。礫を分割した後、横方向の剥離を行うことで平坦面を作っているが、節理に邪魔されている。その剥離によってできた平坦面を打点とし、縦長の剥片を剥離し、石刃（19）として



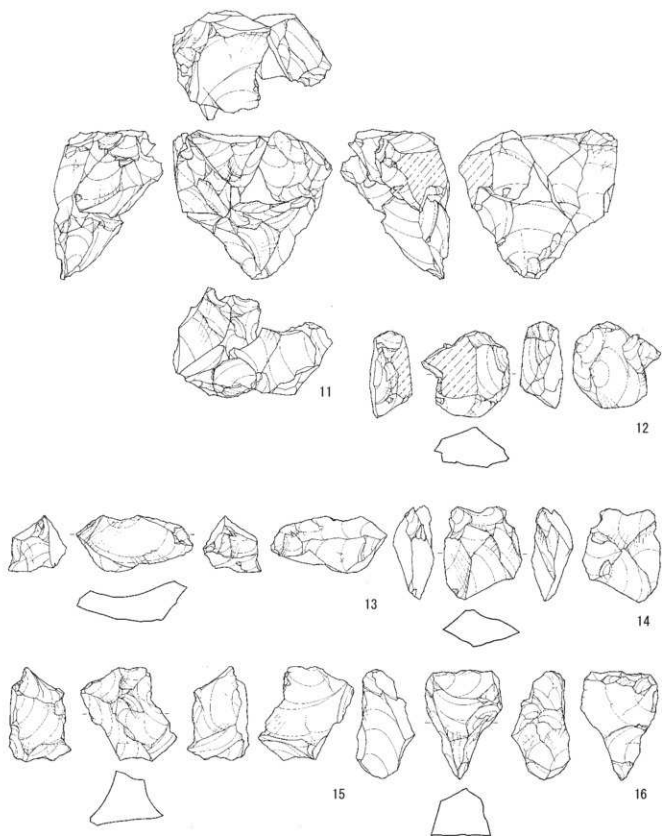
第5図 後期旧石器時代①礫群実測図



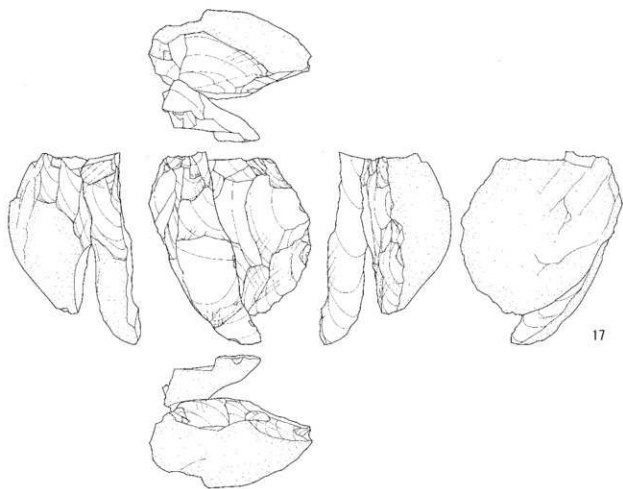
第6図 後期旧石器時代①出土遺物分布図 (S=1/500)



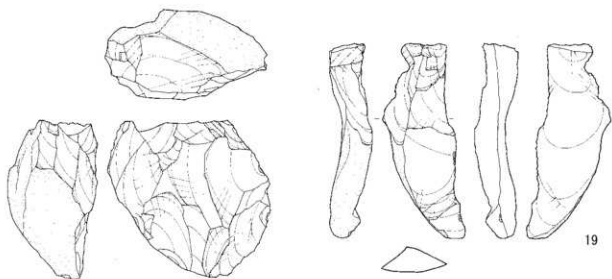
第7図 後期旧石器時代①石器実測図



第 8 図 後期旧石器時代①接合資料 1 実測図



17

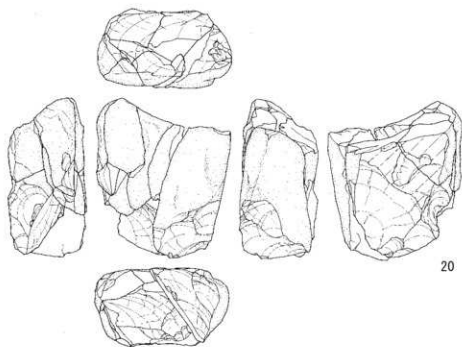


18

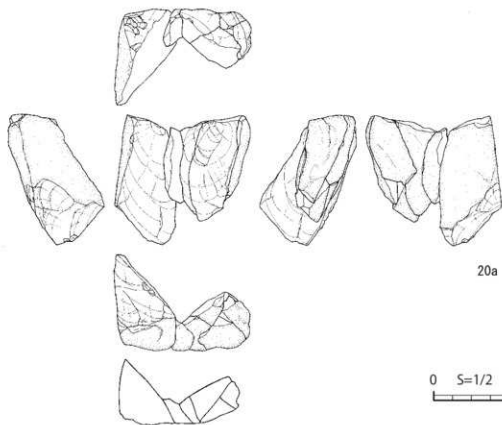
19

0 S=1/2 5cm

第9図 後期旧石器時代①接合資料2実測図



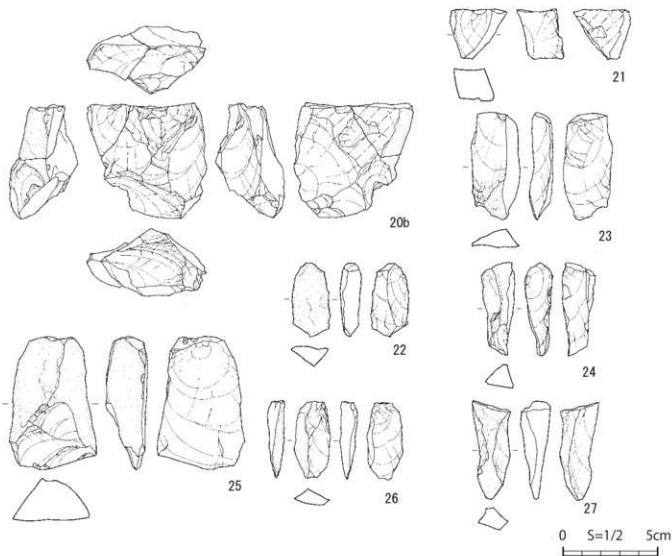
20



20a

0 S=1/2 5cm

第10図 後期旧石器時代①接合資料3実測図(1)



第11図 後期旧石器時代①接合資料3実測図(2)

いる。19を剥離後、18は、さらに側縁から剥片剥離がおこなわれている。石材はH o I群である。

接合資料3 (一次-RM120、第11図)

20は、8点の剥片が接合した資料である。上面を横方向の剥離で平らにし、縦方向の剥離をおこなっているが、25はうまく剥離せず途中で止まっている。縦方向の剥離が終了した後、20bは周縁からの剥離が行われている。石材はH o II群である。

後期旧石器時代②の遺構と遺物

IV a ~ V層にかけての遺構・遺物を後期旧石器時代②とする。今回の調査では、V層を中心に、遺構と遺物を確認している。

【礫群】(第12図~16図)

F区で1基、G区で1基、H区でIV b層検出のもの

が2基、V層検出のものが13基、計17基、I区でIV b層検出が1基、V層検出が9基、計10基、総計22基を礫群と認定している。

2号礫群

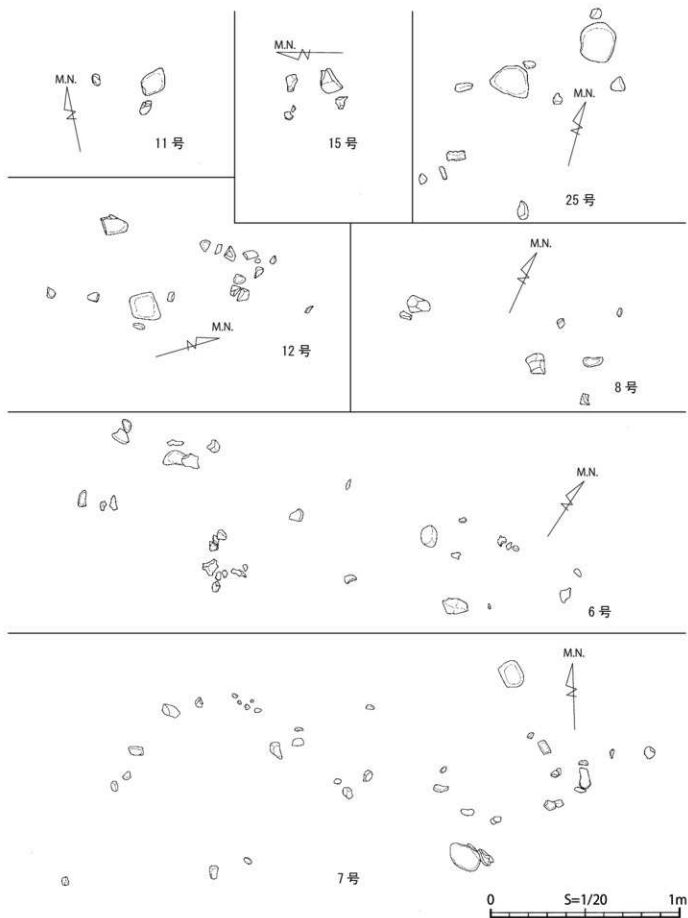
G区北側、V層上部で検出している。赤化・破砕がともに見られる角礫が、小規模であるがまとまって出土している。出土位置も同じレベルであり、周囲に同様の礫は認められない。

5号礫群

礫が集中する箇所が認められ、検出面の礫を取り上げると、下からも礫が検出されるといった垂直分布もみられる。

6号礫群

検出層位がV層中部である。礫は疎らに分布してい



第12図 後期旧石器時代②礫群実測図(1)

るが、1箇所集中する箇所がある。赤化・破砕がみられるが、礫の大きさはまちまちである。

7号礫群

20cm弱～10cm未満の礫が疎らに分布する。平面分布するのみで、垂直分布はみられない。V層上部から中部で検出している。同一面から検出された同様の特徴をもつ8号礫群と近接している。

9号礫群

極めて小規模であるが、礫は密集して出土している。破砕した礫ばかりで構成される。赤化も認められる。

10号礫群

小ぶりの礫が礫間の間を保ちつつ約1mの範囲でまとまる。礫の赤化・破砕も認められる。検出面の礫を取り上げると、下から礫が数点頭を出す状態であった。V層中部で検出している。

13号礫群

礫の数は比較的多く、分布にまとまりがある。2箇所に礫のまとまりが認められ、破砕・赤化している礫がほとんどである。V層上部で検出している。

17号礫群

礫の範囲が2.6mと広い礫群である。礫同士の間隔はさほど詰まっていないが、北側にまとまりが認められる。礫の分布は平面だけでなく、垂直方向にも見られ、上部の礫を取り上げると、すぐに新たな礫が出土するといった状況であった。構成礫の数も範囲も今回の調査の中では最大級の礫群である。

22号礫群

構成礫が大きめで礫同士の間が広く、分布は疎らである。破砕した礫が少ないのが特徴である。V層中部で検出している。

23号礫群

V層中部で検出された礫群で、礫範囲は2.9mと広めである。しかし、礫は密集するわけではなく、小規模なまとまりが2箇所確認できる程度である。礫の数もさほど多くはない。破砕・赤化した礫が比較的多い礫群である。垂直分布は見られない。

24号礫群

礫範囲は2mを超え広いが、礫の数は少なく、礫同士の間隔は空く。近隣には23号礫群があり、便宜上分割して記録したが、出土レベルも変わらず、構成礫も

似ているため、散在する礫は、もともとは、まとまった部分と一連のものである可能性が高い。

32号礫群

礫範囲は今回の調査の中で最大の礫群である。しかし、明確なまとまりはなく、範囲内に散在する状態である。礫は小ぶりものが多く、破砕・赤化したものがほとんどである。

検出層位がIV b層の礫群の所見は次のとおりである。

4号礫群

H区で検出された礫群である。礫は3つのみと極めて小規模な礫群である。

16号礫群

同じくH区で検出している。4号礫群同様、破砕礫で構成され、礫範囲は小規模である。

19号礫群

I区で検出された礫群である。上記の2基とは様相が異なり、礫同士は重なり合う部分も見られ、密集しているが、範囲は小規模である。構成礫は、砂岩主体で赤化や破砕も見られる。

これらの礫群は、後期旧石器時代①の礫群と比較すると、破砕・赤化が見られる礫も多くなり、構成礫の数が増え、礫が密集する傾向にある。ただし、これらの中にも、礫が少なく、疎らに分布するものも存在し、一次調査で言う「いくつかの集中部をもつ礫群」が存在する第IV期、礫が稠密に分布する礫群が乏しい第V期、規模が小さく密度が低い礫群が多い第VI期のそれぞれの特徴が見られる。

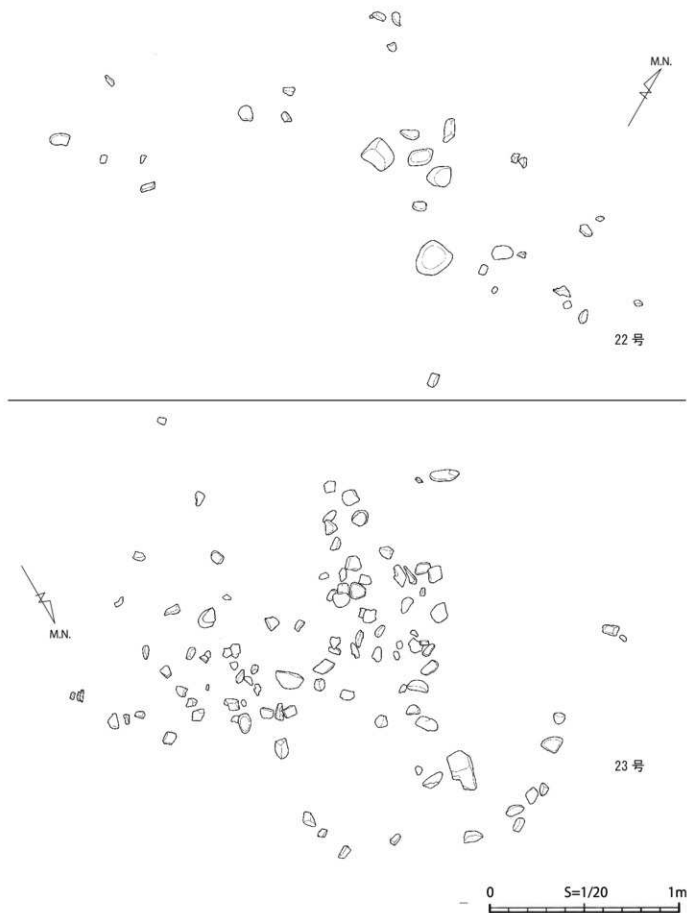
礫群に伴うツールが少ないため、正確な時期の確定はできないが、検出層はV～IV b層の範囲の中に限られるというからも今回調査のA T上位で検出した礫群の時期は、一次調査の後期旧石器時代第IV～VI期にあたる。

【遺物】(第19図～34図)

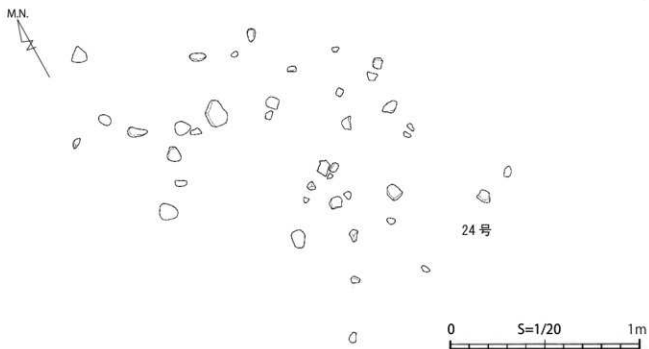
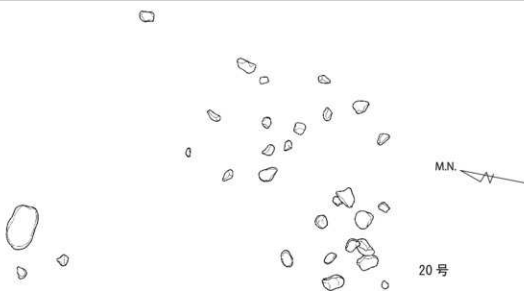
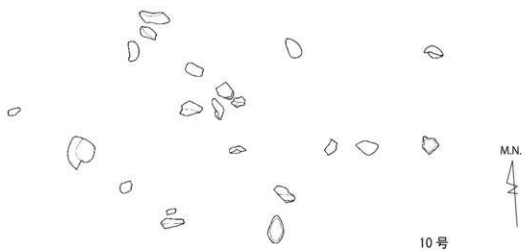
H区を中心にV～IV a層にかけて該当期の遺物が出土している(第17・18図)。

【ナイフ形石器】

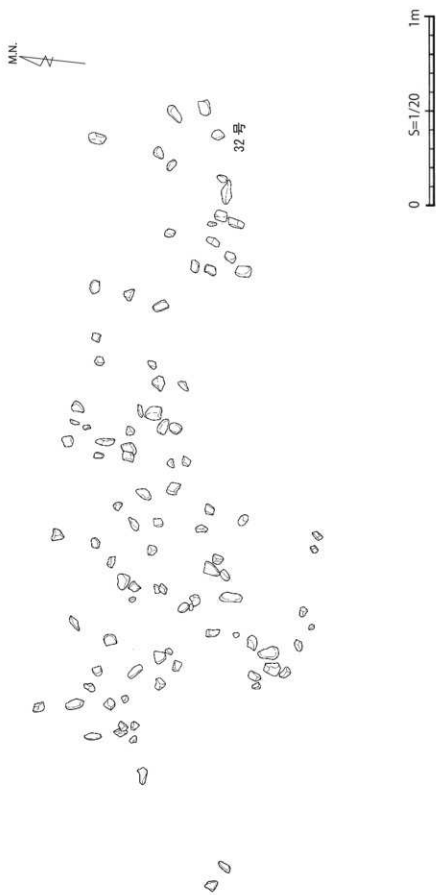
28～39が該当し、出土層位は28がIV a層、29・30がIV b層、それ以外はV層出土である。



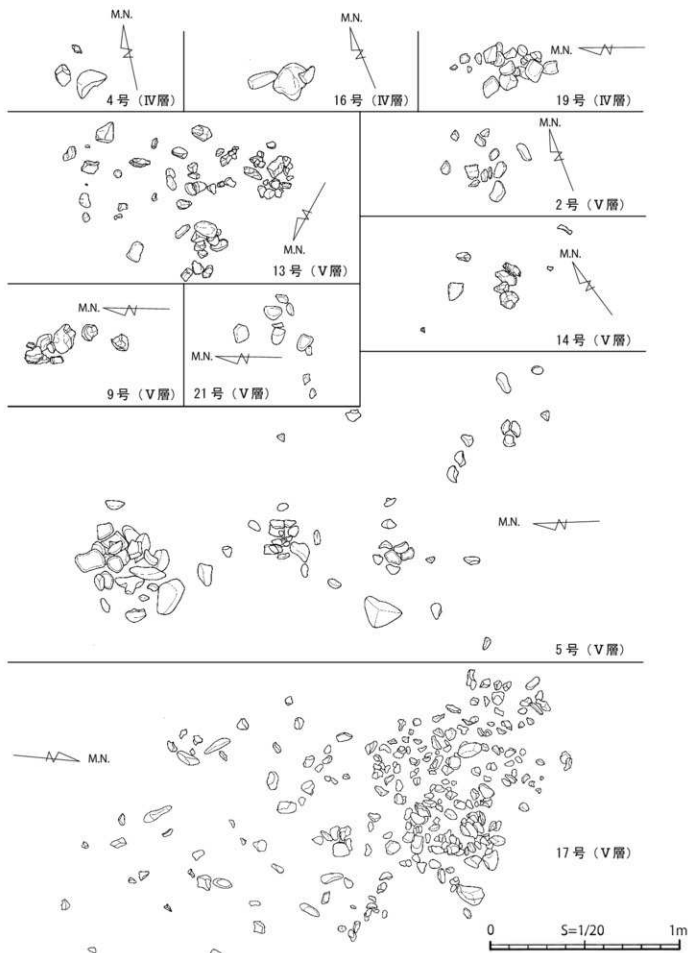
第13図 後期旧石器時代②磔群実測図(2)



第 14 図 後期旧石器時代②礫群実測図 (3)



第15図 後期旧石器時代②礫群実測図(4)



第16図 後期旧石器時代②礫群実測図(5)

決定器種	剥片石器	ナイフ形石器	I群	(基部加工ナイフ形石器) 打面側を基部とし、側縁にブランディングを施す。先端部付近に部分加工を施すものもある。 a: 末端部尖鋭な縦長剥片や石刃を素材とし、背面構成に剥片素材石核のボジ面を取り込む。 b: a 類同様の素材を使用し、背面構成がすべてネ方面から構成される。 (二側縁加工ナイフ形石器)
			II群	a: 石刃やそれに類する縦長剥片を素材とし、これを斜断するようにブランディングにより整形を施したものの(茂呂型・九州型) b: a 類と比較し短身で比厚も大きい。基部を尖鋭に作出する資料を含む。(切り出し形石器・窪谷型ナイフ形石器を含む)
			III群	(一側縁加工ナイフ形石器) a: 瀬戸内技法に類する横割ぎにより獲得された剥片を素材とする。背面はボジ面。一側縁加工が多い(面付型ナイフ形石器を含む) b: a 類以外の剥片を素材とした一側縁加工ナイフ形石器
			IV群	(部分加工ナイフ形石器)
			V群	(角錐状石器) 鋭利な縁辺を残しながらもナイフ形石器一般にみられる刃部角よりも鈍い縁辺で、二次加工などの技術的特徴は、角錐状石器に類似するもの。
			VI群	その他
		台形石器・台形棒石器	剥片を素材とし、両面刃を備えるブランディングツール。A T 上位出土資料は台形石器、下位出土資料は台形棒石器としている。 I群 石刃ないしこれに類する縦長剥片を素材とし、これを楕円に用いてブランディング整形を施す II群 I群以外の剥片を素材とする	
		角錐状石器(三稜尖頭器)	ナイフ形石器のブランディングに近い急斜度の二次加工が周縁を巡る尖頭形の石器	
		尖頭器	緩斜度の二次加工が周縁を巡る尖頭形の石器	
		搔器	I群 石刃もしくは縦長剥片の末端にスクレイパーエッジを作出する一群 II群 I群以外の縦長剥片や不定形剥片を素材とする(円形剛搔器を含む)	
		削器	スクレイパーエッジを有するツールで搔器以外の資料	
		彫器	桶状剥離痕を有するツール	
	細石刃	いわゆる調整細石刃も含む		
	微細剥離剥片	剥片の縁辺に不規則な微細剥離痕を有する資料		
	二次加工剥片	明確な二次加工痕を有する資料		
	硬塊石器	磯器	I群 両刃磯器	
			II群 片刃磯器	
			III群 I・II 以外	
		敲石	I群 棒状	
II群 不整棒状				
III群 球状				
IV群 不整球状				
V群 扁平				
VI群 錘状				
磨石	磨面を有する礫			
台石	被敲打痕や摩擦面が観察される資料			
工程器種	石核	I群	(石刃石核) a: 通常の石刃石核。分厚な剥片や分割礫が素材で、作業面は一定の幅を持つもの b: 剥片を素材とし、その小口を作業面に設定するもの (有底剥片石核)	
		II群	瀬戸内技法に類する横割ぎの剥片剥離工程の結果残される石核。主に剥片素材の石核を用い、目的剥片の背面に石材素材剥片のボジ面を取り込む剥片剥離に伴う石核 (求心状石核)	
		III群	石核の周囲の縁辺を打面とした求心状の剥片剥離に伴う石核。分割礫、剥片を素材とする。生産される剥片は貝殻殻・不定形剥片が多い。	
		IV群	(箕子状石核) 打面転位を複数回繰り返した結果形状が箕子状になる。	
		V群	(礫状石核) 礫を素材とし、礫面を打面として貝殻殻・不定形剥片を生産する。	
		VI群	その他	
	細石刃石核	A類	(=臼塔型・茶壺型・扁平型)	
		B類	両面もしくは片面に礫面を配する。扁平な小口に作業面を設定する。	
		C類	(=野岳・休場型)	
		D類	(=岩土原型・平久島型)	
E類	厚手の礫や分割礫の主要剥離面や分割面を打面に設定する。打面から側面に向けて石核整形剥離をおこなう。平面形は逆台形(U字形)			

第2表 後期旧石器時代石器分類表

I群 (第19図 28・29・31・32・33・34)

32・33は実測図の正面の左剥離面にポジ面を取り込む、剥片素材石核を素材としたナイフ形石器である。側縁の加工は見られない。I群a類にあたる。

28の石材はCh I群で、縦長の剥片の右側縁に刃潰し加工が施されている。I群b類にあたる。ただし、先端はさほど鋭利ではなく、他のナイフ形石器と形状が異なる。一次調査でもこれに類するものは確認されていない。29は一側縁ともう一方の中央付近まで、調整が施されている。先端は欠損している。34は、Ch群の縦長剥片を素材としたI群b群のナイフ形石器である。

II群 (第19図 30・36)

30・36は二側縁加工切出形ナイフ形石器であり、II群b類に分類される。30はいわゆる埋谷型ナイフ形石器の特徴と合致する資料である。断面形はやや厚い。35は基部の二側縁に加工が施される点で、30と類似するが、やや細身で薄い。石材は、30がRy I a群、36がS S h II群である。

III群 (第19図 35・38)

35・38はIII群a類にあたる。瀬戸内技法に類する横剥ぎによって獲得した剥片を用いた一側縁加工ナイフ形石器である。35は、背面方向からも剥離が施されている。

V群 (第19図 39)

S S h I群の縦長剥片を用い、基部付近は大振りな二側縁加工を施し、先端部分は刃部と細かな調整剥離にわかれる。刃部がなければ、角錐状石器と製作技術、形態が共通しているため、角錐状石器となる可能性もある。

【角錐状石器】(第19図 40～43)

40～43が該当する。40は、小型の角錐状石器である。縦長剥片の両側縁に鋸歯状の調整を施し、稜上付近の調整はほとんど見られない。43は、縦長剥片を斜位に用い、両側縁に鋸歯状の加工を施す。41は先端が、42は基部がそれぞれ欠損しているため、全体の形状は把握できないが、42は、大振りな剥離のみで鋸歯状の加工はみられず、先端は節理に邪魔をされており、一度の剥離で、背面まで一気に剥離している。

【尖頭器】(第19図 44)

平坦剥離によって調整を行い、先端を鋭利に仕上げている。背面は平坦面ではなく、剥離の稜線が残っている。石材はS S h I群である。

【削器】(第19図 45・47)

45は、横長の剥片の左側縁に加工を施している削器である。47は、Ry II a群の一部礫面を残した縦長剥片を用い、末端に連続した二次加工を施し、刃部としている。一部欠損している。削器としているが、礫面が残る状態なので、製作途中で先端が欠損した角錐状石器の未成品の可能性もある。

【搔器】(第20図 49～52)

すべて円形搔器である。49・50は、薄い剥片の周縁に刃部を作出している。49は正円に近い形で全周縁に刃部を作出しているエンドスクレイパーである。64は、楕円形で刃部作出のための加工は長径側、二次加工が基部にそれぞれ施されている。51・52は厚手の横長剥片の周縁に刃部作出のための加工を施している。52は、基部を除き、刃部を正円に近い形で作り出している。51は不定形な剥片の一部を打ち欠き、楕円形にした後、下部と一部側縁に刃部を作出しており、基部にも一部調整が見られる。いずれも搔器II群である。

【二次加工剥片・剥片等】(第19・21図47・48・53～77)

36は、基部加工をおこなっていないが、左側の剥離面にポジ面を取りこむ剥片であり、I群a類の素材となり得る剥片である。48はI群a類の素材になるような、ポジ面をもつ剥片素材石核である。53は、両側縁に並列剥離が見られる二次加工剥片であるが、一見、石鏃のような形状をしている。基部に抉りのような剥離が見られ、そのあとに基部の右側に加工が施されている。削器的な機能をもつ石器であろうか。54・55は縦長の剥片に二次加工を施している。56は、先端の尖った縦長剥片の端部一方のみに、細かな剥離を施している。58は同様の素材を使うが、両端に加工が見られる。59～62・64は剥片の側縁に加工を施す二次加工剥片である。63は縦長の剥片を素材とし、右側縁に刃部を作出している削器的な機能をもった二次加工剥片である。65～69は、頭部調整をおこなっている縦長剥片である。71～77は一般的な剥片であり、微細剥離がみられるものや石刃も含まれる。45は、ブランディングチップである。179・180は細石刃である。

【敲石】(第21図 78・79)

78・79は掌に収まる大きさの礫を使用した敲石である。平面形態が楕円形で、端部に敲打痕が確認される。いずれもS a I群である。

【接合資料】

接合資料4 (二次-1、第22～26図)

33点の剥片が接合した資料である。H o群の人頭大の礫を素材としている。作業内容は、礫面除去の剥離であり、目的剥片は持ち出されている。瀬戸内技法を意識したような技法が見受けられる。

作業の順番は、礫面除去のための剥離がほとんどであるため、分割後の先後関係は不明であるが、80 aと80 cは、それぞれ、礫の礫面除去のため横剥ぎをおこなった後、さらに打面転位し、目的剥片の獲得のため、剥離を行っている。しかし、同じ原石を分割した塊でも、80 c～98のように、剥片の腹面に背面に取り込もうとする意図がみられる剥片を含むグループが認められる。

接合資料5 (二次-5、第27・28図)

礫の大きさ形状は把握できないが、8点の剥片から成る接合資料である。作業の順番は、111 a→111 bで、111 aの剥離後、90°の打面転位が見られる。剥片に礫面を残すものや、節理面を持つものがみられるため、それを除去するためにできた剥片である。よって、目的剥片は持ち出されたと考えられる。

接合資料6 (二次-2、第29図)

7点の剥片からなる接合資料である。一部礫面を残している。大きさは不明であるが、礫面から推測すると亜角礫を素材としたものである。目的剥片はなく、節理面が多く見られる。このグループの中での剥離の順番は、127→126→129→128→131である。この間に128の剥片獲得の際に90°の打面転位をおこない、131、130それぞれの剥片で打面転位が認められる。

接合資料7 (二次-3、第30・31図)

10点の剥片から成る接合資料である。すべての剥片の背面に礫面をもつ。礫面から推測すると、大きさは、人頭大ほどはだろうか。礫面除去の際の剥片剥離であり、石核、目的剥片は、持ち出されている。

接合資料8 (一次-RM62、第32～34図)

剥片、石核計46点からなる接合資料である。拳大の

礫を素材としている。おもな作業は礫面除去に伴う剥片剥離であり、目的剥片は持ち出されている。礫の端部には節理面が多く見られ、うまく剥離できていない。

接合資料9 (第29図)

3点の剥片から成る接合資料である。おそらく、角錐状石器などの素材となる分厚な剥片の取得が目的であろうが、節理が多く、それ以上の作業には至っていない。

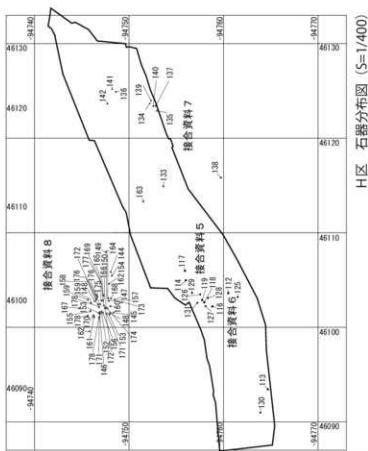
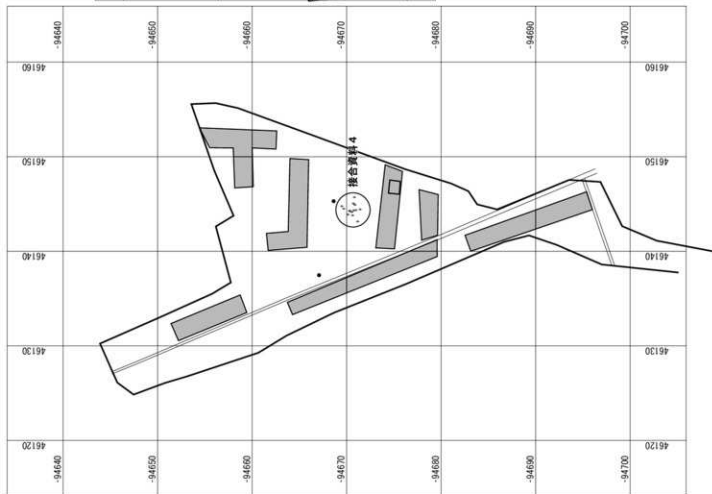
時期細分について

一次調査の報告の際に、第1～VII期に設定された時期区分は、礫群の出土レベルおよび、遺物の分布状況から細分されたものである。調査区が、一次調査に隣接、もしくは挟まれた位置に存在する二・三次調査でこの時期区分を適応しようとした場合、礫群、ツール、母岩資料がともに時期区分を行う上で十分な量ではないため、細かく当てはめていくことができない。よって、今回の報告では、A T上位、下位におおまかに分けて報告した。この中で、A T下位の後期旧石器時代①に関しては、出土遺物はツールがないため時期比定は難しいが、礫群の様相から、第II・III期に相当する。また、A T上位の後期旧石器時代②は、二側縁加工ナイフが主要ツールとなる第IV期 (II群 a・b類)、瀬戸内系石器を含む多様な石器を含む第V期 (III群 a類、I群 c類、角錐状石器など)、九州地域において終末期と評価されるナイフ形石器を含む第VI期など、少ないながらも各時期の特徴となるツールが存在することからも、第IV～VI期内に収まるといえる。

母岩認定

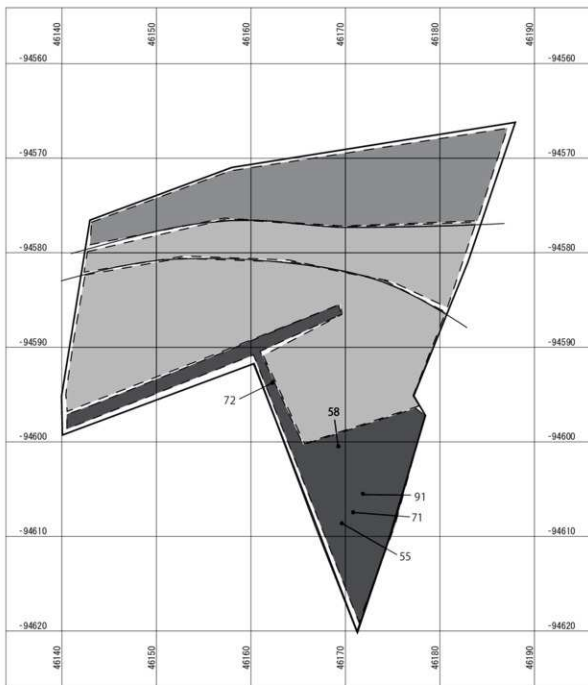
今回報告した接合資料については、二次調査時に出土した資料で構成されるもの、もしくは一次調査の資料であるが母岩認定されていないものを含む接合資料を、A T下位のものは「二次①-1～2」、A T上位のものは「二次②-1～3」としている。

また、一次調査の整理段階では接合せず、母岩Noを「RM62-1～4」、「RM120」とつけていたものが、二次調査の資料を含め今回接合している。この接合資料に関しては、まとめて「一次-RM62」、またRM「一次-RM120」としている。

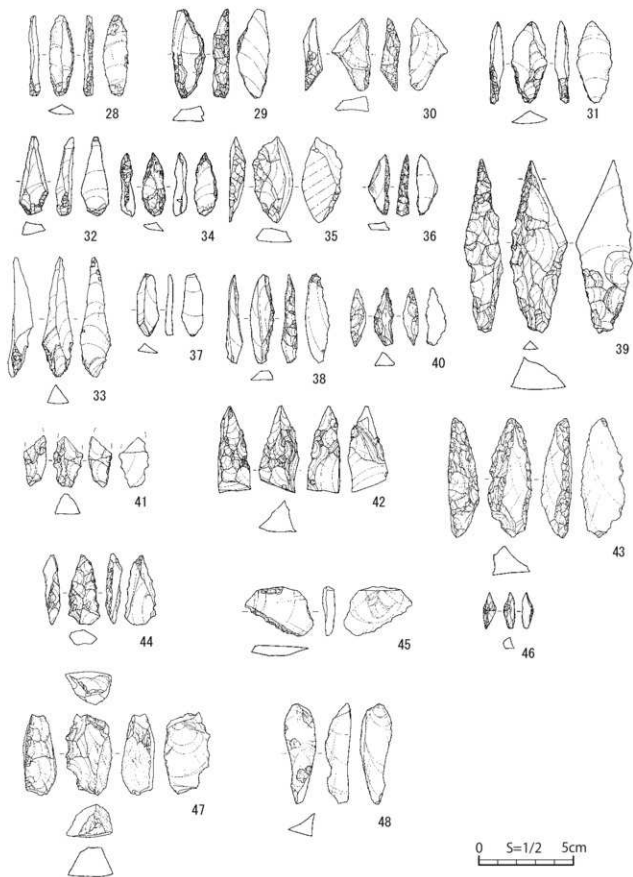


F区 石器分布図 (S=1/400)

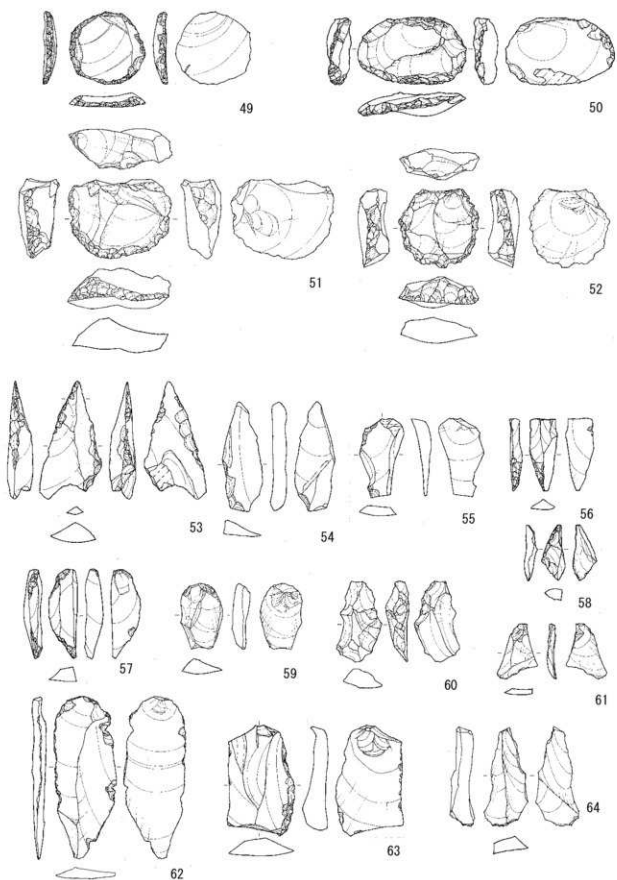
第 17 図 F・H区石器分布図



第 18 图 I 区石器分布图 (S=1/400)

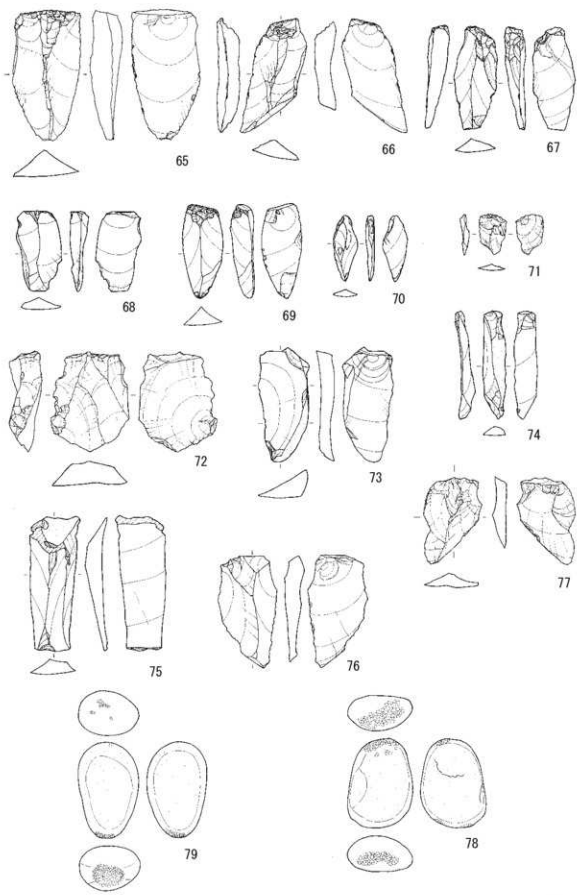


第 19 図 後期旧石器時代②石器群実測図 (1)



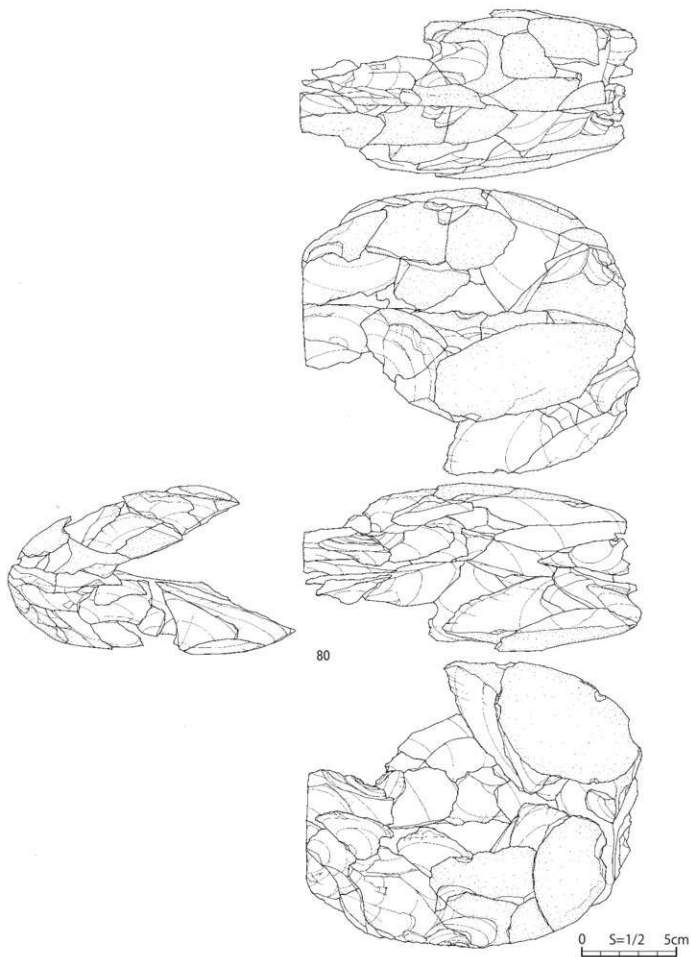
0 1/2 5cm

第20図 後期旧石器時代②石器実測図(2)

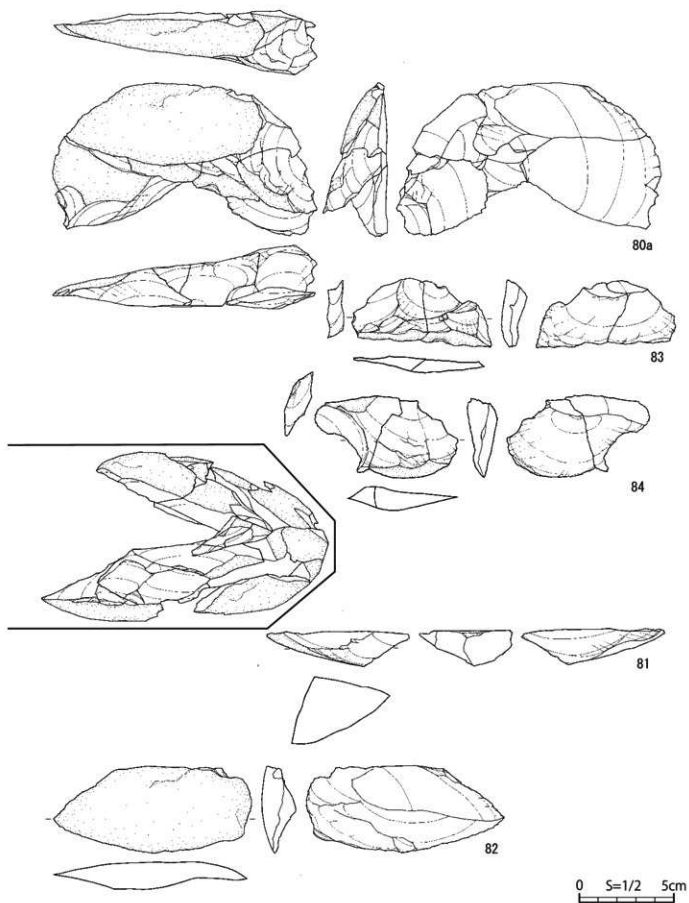


0 5=1/2 5cm

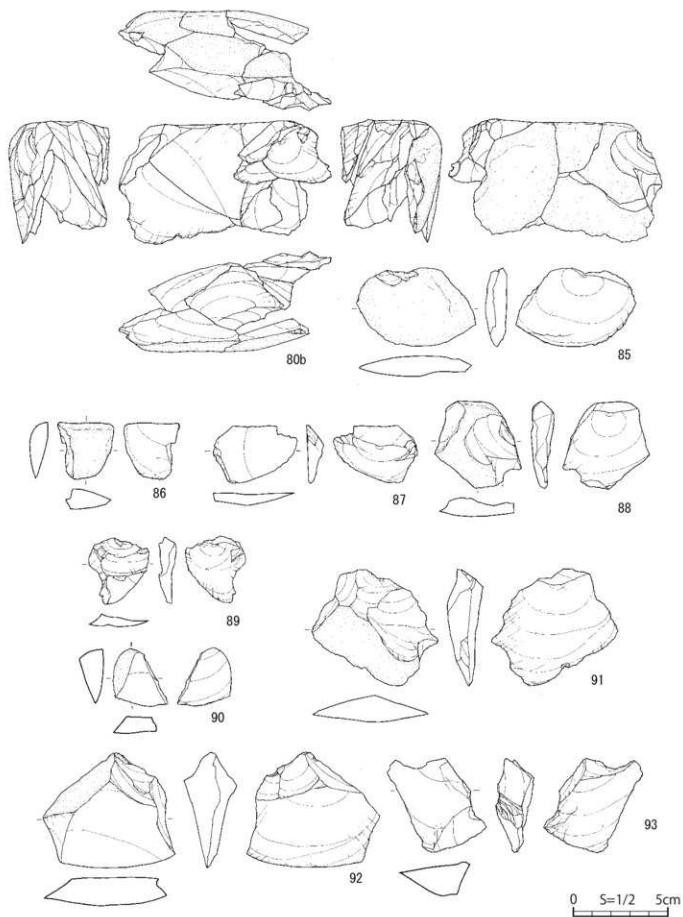
第 21 図 後期旧石器時代②石器実測図 (3)



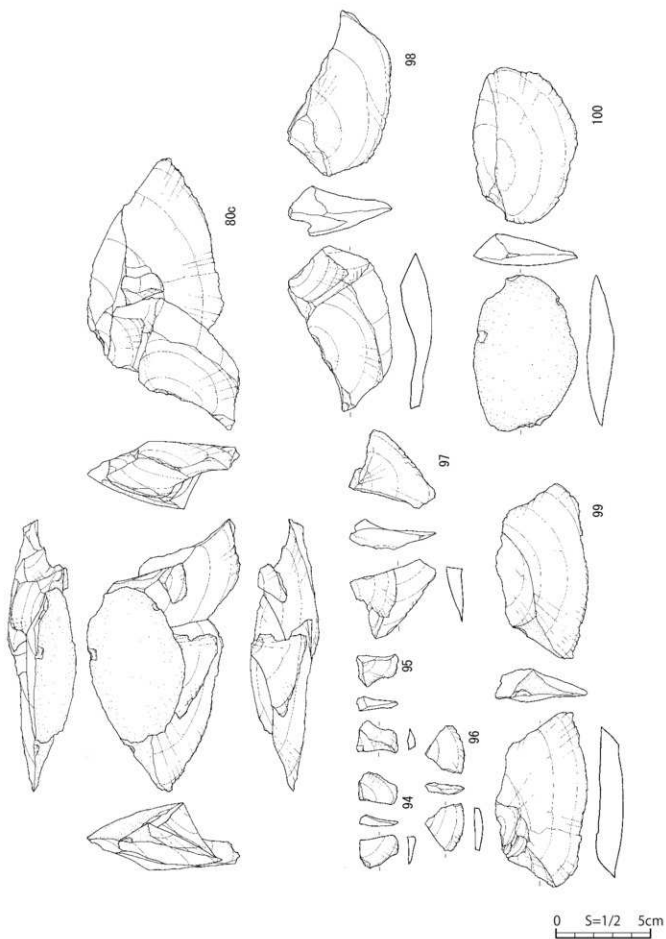
第 22 図 後期旧石器時代②接合資料 4 実測図 (1)



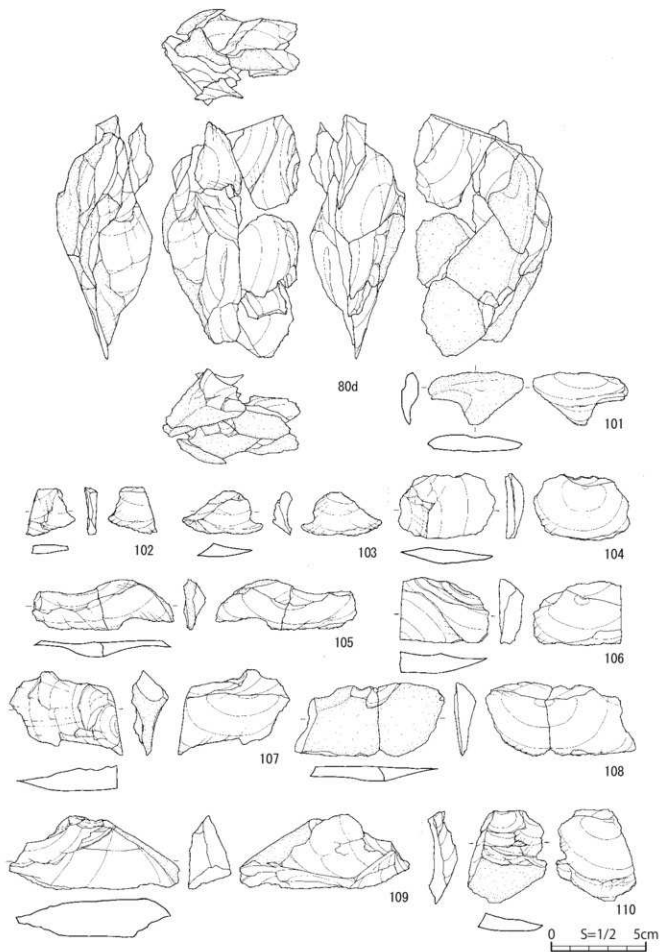
第 23 図 後期旧石器時代②接合資料 4 実測図 (2)



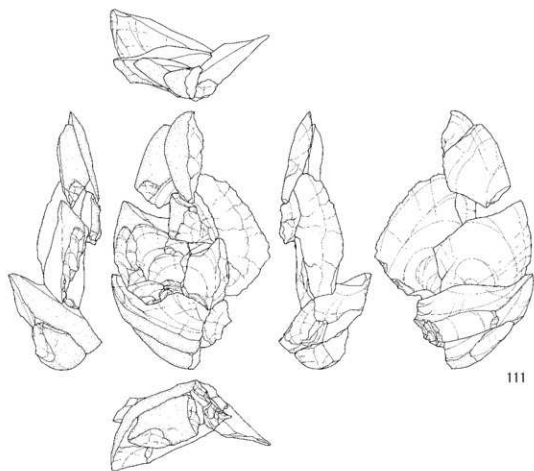
第 24 図 後期旧石器時代②接合資料 4 実測図 (3)



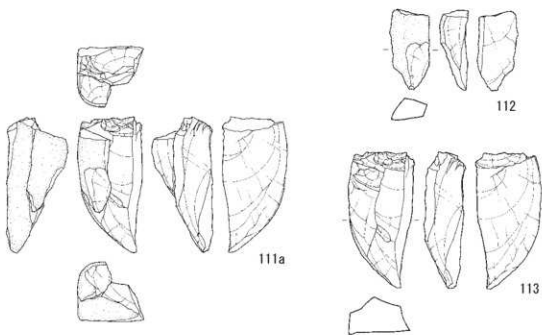
第 25 図 後期旧石器時代②接合資料 4 実測図 (4)



第 26 図 後期旧石器時代②接合資料 4 実測図 (5)



111



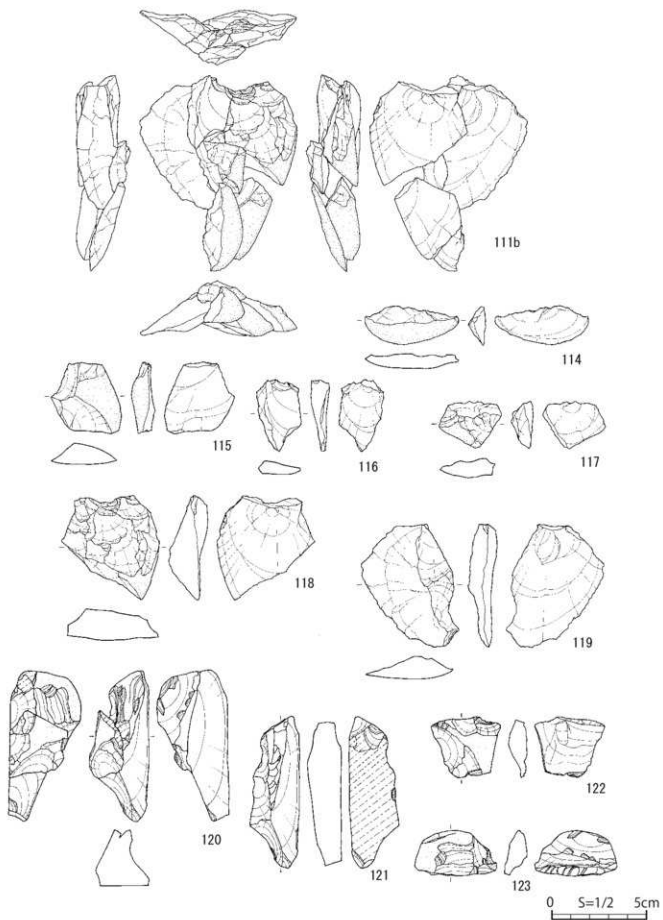
112

111a

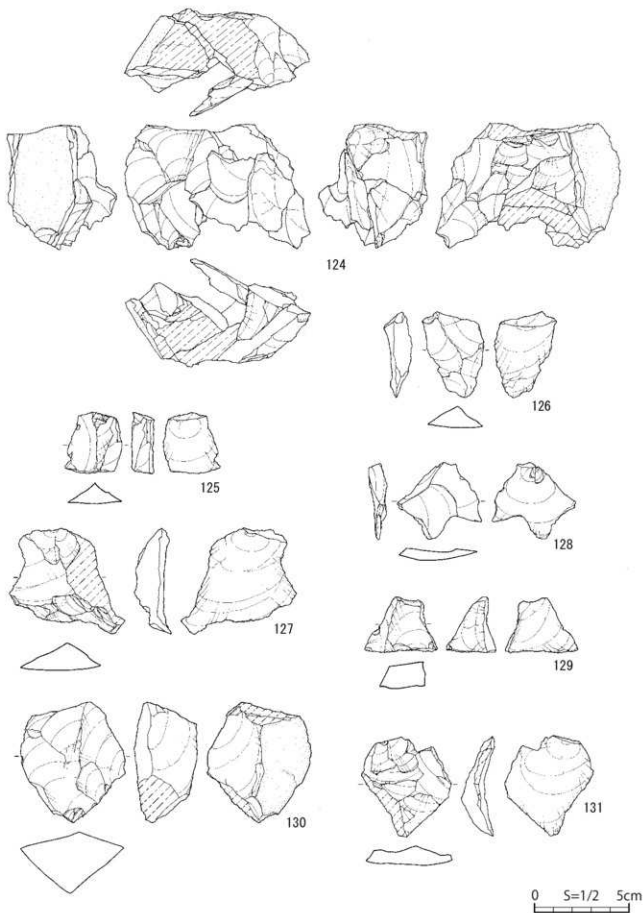
113

0 S=1/2 5cm

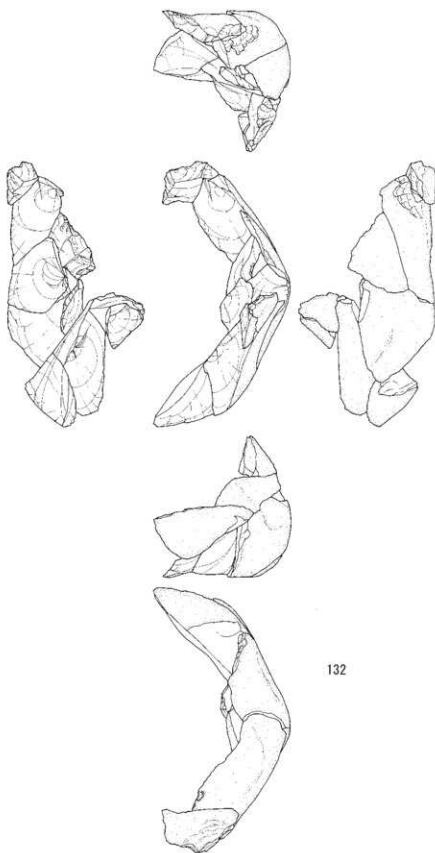
第 27 図 後期旧石器時代②接合資料 S 実測図 (1)



第 28 図 後期旧石器時代②接合資料 S 実測図 (2)



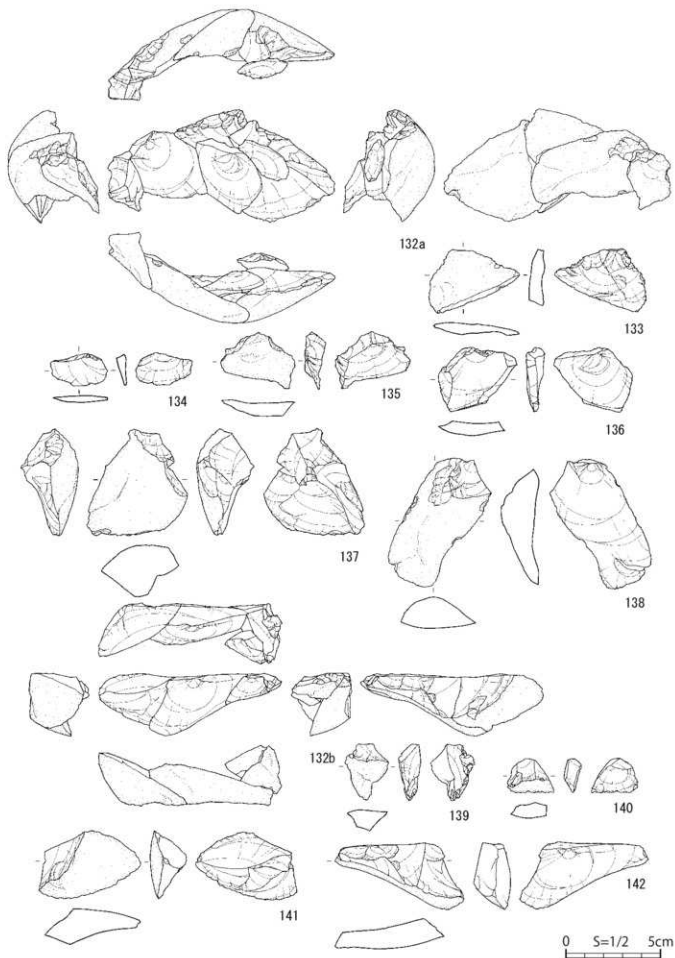
第 29 図 後期旧石器時代②接合資料 6 実測図



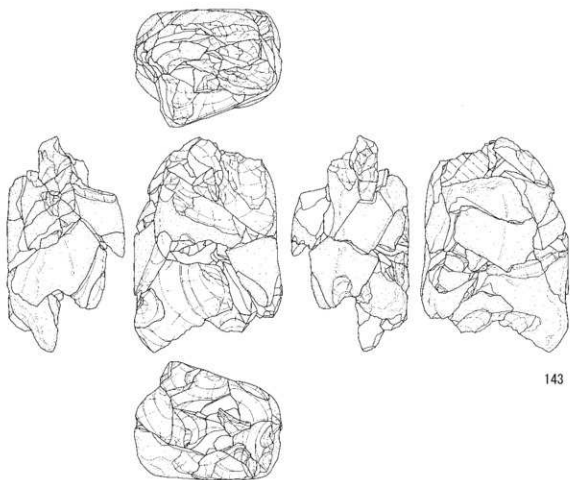
132

0 S=1/2 5cm

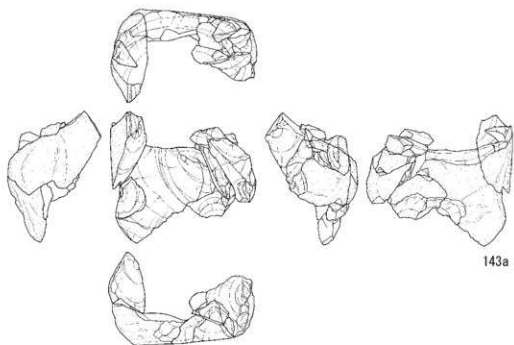
第 30 図 後期旧石器時代②接合資料 7 実測図 (1)



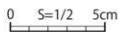
第31図 後期旧石器時代②接合資料7実測図(2)



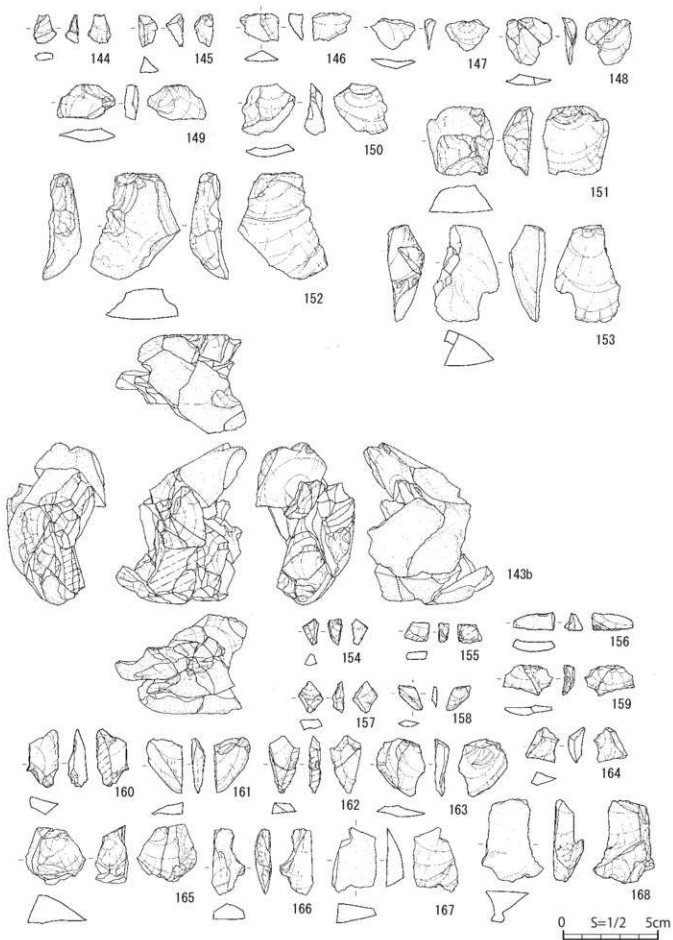
143



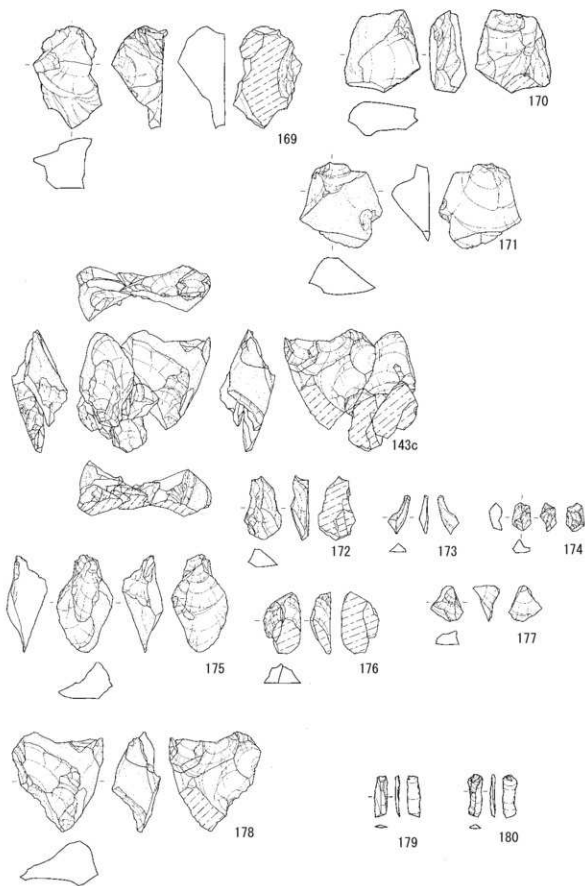
143a



第 32 図 後期旧石器時代②接合資料 8 実測図 (1)



第33図 後期旧石器時代②接合資料8実測図(2)



0 5=1/2 5cm

第34図 後期旧石器時代②接合資料8(3)・細石刃実測図

第2節 縄文時代の遺構と遺物

縄文時代早期の遺構

当該当期の遺構は表土もしくはI層除去後の面であるⅢ～Ⅳb層で検出している。遺物に関しては、遺構埋土内に含まれるものと、包含層（I層）出土のものがある。

【集石遺構】

F区で8基、G区で3基、H区で2基、I区で4基の総計17基の集石遺構が確認された。一次調査分を含めると216基にのぼる。（第35図）

掲載にあたり、一次調査を含め検討をおこなっているが、時間的制約があり一次調査の集石遺構の図面の浄書が十分にできなかった。そのため、一次調査分は一部のみ掲載となり、残りは観察表での掲載にとどめている。

一次調査で検出したものを含め、本遺跡で確認できた集石遺構では、以下のような属性があげることができる。

○掘り込みの形態

Ⅰ類：土坑（掘り込み）を伴わないもの

Ⅱ類：土坑（掘り込み）を伴う

断面形態—上端と底面の幅の差が少ないもの

Ⅲ類：土坑（掘り込み）を伴う

断面形態—底面に向かって幅が狭くなるもの

（配石を意識）

○配石の有無

a：有 b：無

※ここでいう配石は①破碎しておらず、上部の礫とは異なる形状と大きさ、②人為的に「配置」した礫と認識できるものを配石としている。

集石遺構を分類するにあたり、Ⅲ～Ⅳb層で検出した縄文時代早期の遺構に対して、第I分冊でいう縄文時代後期以降の土壌消失現象による影響が考えられる。よって今回はその影響を受けて、上部の礫および土坑の上端が削平されていたと仮定した場合でも、ある程度傾向がわかる属性を抽出している。

以上の属性をふまえ、各集石遺構を分類すると、以下のようなタイプに分かれる。

なお、一次調査分の記述については、集石遺構の略記号「S I」を頭につけ、二・三次調査分は「○号集石遺構」と記述している。各集石の詳細については観察表（第7表）を参照されたい。

【Ⅰ類】（第36図）

礫は密に集まってはいるものの、明確な掘り込みは確認できない。

F区で検出した1号集石遺構と2号集石遺構が該当する。構成礫の中で、破碎したものを確認できるが、遺構に伴う炭化物は確認できていない。礫はそれぞれ40～155cmの範囲で分布している。

S I 16

A区で検出している。礫範囲は135cmとやや広めである。比較的礫が密集している。

S I 97

A区で検出している。礫範囲は88cmであるが、疎らである。破碎した礫がほとんどで、尾鈴山酸性岩類の利用が目立つ。

2号集石遺構

F区で検出している。周辺には13～4号集石遺構が分布している。礫範囲は40cmと狭い。礫は破碎したものがほとんどである。尾鈴山酸性岩類の利用が目立つ。

【Ⅱa類】（第37・38図）

土坑を伴うのが浅い。底面に配石を有するが、底面配石に沿って狭くならず、皿状を呈する一群である。土坑の規模は長径が75cm～156cm、深さは10～54cmとさまざまであるが、長径が100cm以上のもので深さ30cm以上のものが多い。二・三次調査では、H区の1基のみ該当する。

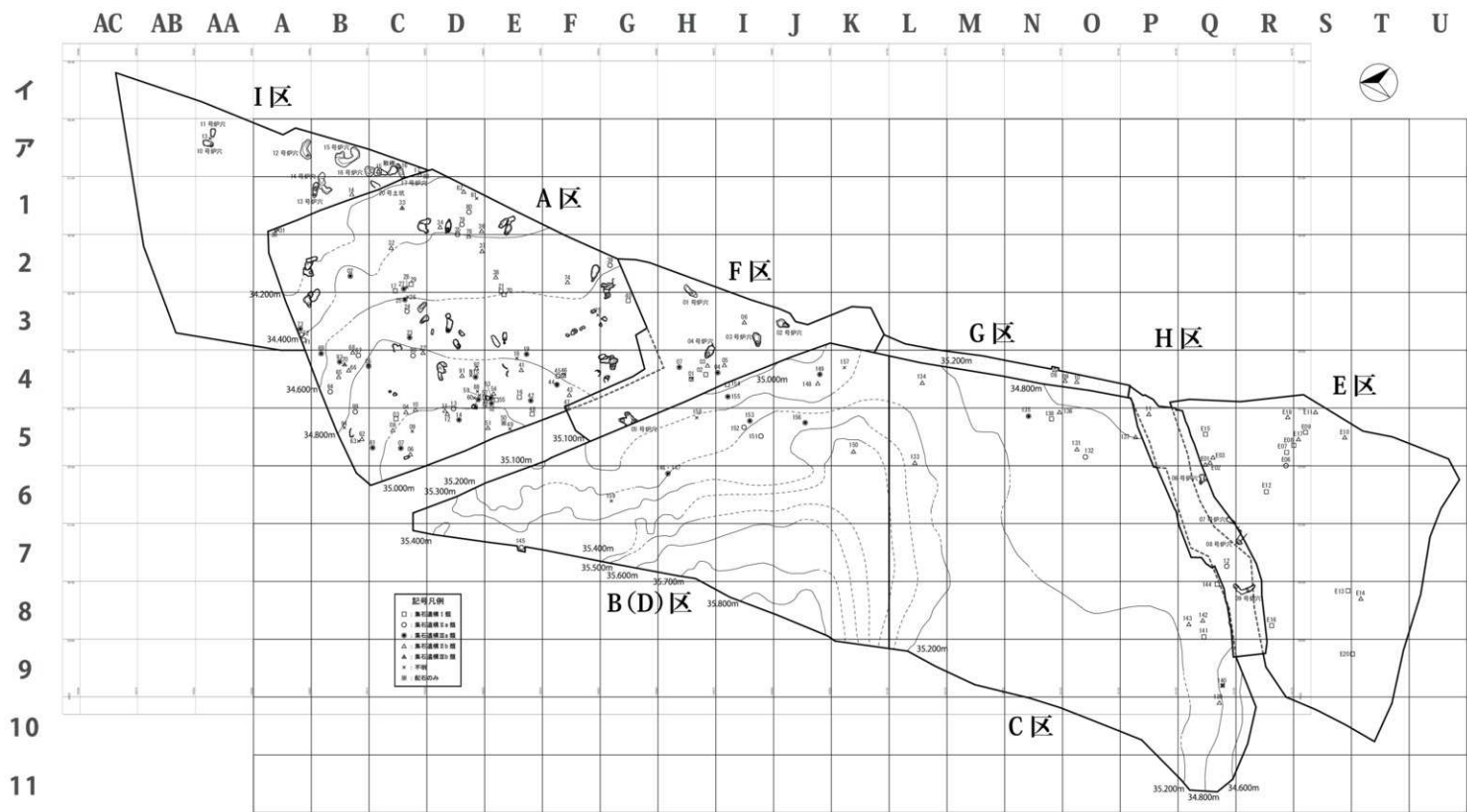
S I 13

A区で検出している。土坑の規模は長径110cmと大きく、深さも52cmと深い。Ⅲa類ほど底面は狭くならず、皿状である。配石は30cm以上の礫を不規則に平置きしている。

S I 43

A区で検出している。上部の礫の密度にばらつきがあるものの、土坑の規模、礫の量ともに標準的なものである。

配石は、平置きした中央の礫を囲む礫で、土坑の壁面に沿うような状態で配されているのが特徴的である。



第 35 図 縄文早期遺構分布図 (S=1/650)

S I 64

配石は中央に縦長の礫を置き、それを囲むように礫をめぐらせ花弁状としている。

S I 132

土坑の規模は長径126 cmと大きめだが、深さは10 cmと浅い。配石は小ぶりの礫を使用している。配置には規則性は見られないが、上部礫とは明らかに様相が異なるため、これらの礫を配石とした。

12号集石遺構

H区で検出している。土坑の規模は、大きいのが深さは21 cmと浅めである。配石は中央に平らな礫を配置した後、まわりに同様の礫をめぐらせている。埋土中に1 cm前後の炭化粒を含んでいたが、大きいものは確認できなかった。

この集石遺構の上部は、まずI層中で散礫が見つかり、それをはずすと集石遺構と認定できるほどのまとまりをもつ礫が確認できた。

【II b類】(第38～39図)

本遺跡の中で最も多くみられる一群である。伴う土坑は浅く、底面は皿状である。配石はもたない。土坑の規模は長径63～180 cm、深さは5～35 cmと浅く、特に20 cm以下のものが多い。二・三次調査では、F区で2基、H区で1基が該当する。

S I 8

熱を受けて赤化したと思われる礫が多く見られる。

S I 19 (2)

礫の大きさにばらつきがある。

S I 143

土坑の規模の割に礫が少ない。埋土中に微量であるが炭化物を含んでいる。

3号集石遺構

F区で検出している。町水道の水道管によって一部削平を受けている。土坑の底面はIV b層まで達している。礫は、大きめで破碎しているものが少ない。上の礫の方が大きいものが多い。

5号集石遺構

F区で検出している。町水道の水道管によって一部削平を受けている。土坑の上部に礫が集中し、下部には礫がほとんど見られなかった。土坑の規模に対して、礫の数が少ない。

6号集石遺構

F区で検出しており、5号集石遺構と隣接した集石遺構である。町水道の水道管によって一部削平を受けている。5号同様、土坑の上部に礫が集中し、下部には礫がほとんど見られなかった。

8号集石遺構

G区調査区の東側で検出している。付近に9・10号集石遺構がある。G区の東側には畑があり、調査区内でも耕作土が厚く堆積しており、I層が確認できない部分であったため、上部をかなり削平された可能性が高い。

9号集石遺構

G区で検出している。掘り込みの規模、礫範囲、礫の大きさともに小規模である。

11号集石遺構

H区東側で検出している。H区は道路下にあたるため、I層以下は削平を受けており、検出面はIV a層であった。礫は少なく、掘り込みの規模も小さい。

15号集石遺構

I区で検出している。調査直前まで竹が植えられており、根が礫を巻き込んでいた。そのため、上部はかなり削平を受けていると思われる。炉穴の真ん中を切るように掘り込まれている集石遺構で、掘り込みの規模の割に礫が少ない。

【III a類】(第39～43図)

礫範囲が広く、掘り込みが深い一群。掘り込みの規模は、長径98 cm～205 cm、深さは20～75 cmと大きく、深いものが多いのが特徴である。底面が配石を意識しているため狭い。A区に多く分布しており、二・三次調査でもA区に隣接するF区とI区に集中して見られる。

S I 7

礫範囲は広いが、土坑の規模は103 cmと若干小さい。礫は破碎し、小さくなったものが多い。この集石遺構の特徴は土坑の形態である。配石の上端部分から広がって段場のようなたちになっている。配石は底面から壁に向かって一列線を並べ、そこから、壁面に沿うように巡らせている。その際にできた隙間を補填するため、小さな礫も置かれている。

S I 14

この集石遺構も土坑の形態が、配石の上端部分から広がって段塚のようになっている。底面に敷き詰めるように置かれた配石には規則性は見られない。

S I 52・53

2基の集石遺構が切り合っている。先後関係はS I 52→S I 53である。両者ともⅢa類で、どちらにも段塚状の土坑を伴うものである。

配石に関しては、S I 52は中央に1つ礫を置き、それを囲むように四つの礫を配している。S I 53はS I 52に比べ、底面は広い。中央に礫を1つ置き、それを囲むように配している。

S I 61

規模は本遺跡において最大級の集石遺構である。段塚状の土坑を伴う。ただし、北西側は反対側に比べ、立ち上がりがゆるやかであり、上部の礫も北西側に広がりをみせている。

配石は、段塚の部分の中央に巨礫を置いてその周りに一回り小さな礫が巡る整った配置である。

S I 69

段塚状の土坑を伴う。

配石は、段塚の部分の中央に人頭大以上の礫を置き、同様の礫を3つ配し、その隙間を小さめの礫で埋めている。

S I 73

一部調査区外に延びている。礫は小さいものが多く、範囲も小規模である。配石は中央に小さめの礫を置き、それを囲むように扁平な礫を配している。

S I 76

A区で検出している。掘り込みの規模は、大きめで深い。掘り込みの埋土に1cm以下の炭化粒を多く含む。

配石は中央に人頭大の礫を2つ置き、周りに同じ大きさの礫をめぐらせ花弁状になっている。

4号集石遺構

F区で検出している。礫は大きいものが多く、形状も破砕しているものもあれば、自然礫のままのものもありばらつきがある。少し離れた南西側に数個の礫がかたまっただけ出土している。しかし、この集石遺構に伴うものかどうか不明である。

7号集石遺構

F区で検出している。全体的に他の集石遺構に比べ礫が大きいが、特に北西側に大きな礫が集中している。

土坑の形状はきれいな円形で、Ⅲa類のなかでも底面が広い。底面に合わせるように、配石も大きく中央においた1つの礫を囲むような配置である。

17号集石遺構

I区で検出している。2基の炉穴の端を切るように土坑を掘り込んでいる。上部の礫は削平を受けほとんど残っておらず、検出時には配石が露出している状態であった。配石は2つの礫を平置きし、その周りに大きめの礫を土坑の壁面に沿うように配しているが規則性はない。

【Ⅲb類】(第44図)

土坑の形状はⅢa類と類似しているが、配石を伴わない一群である。一次調査で確認されたS I 70・163の2基のみ該当する。

S I 70

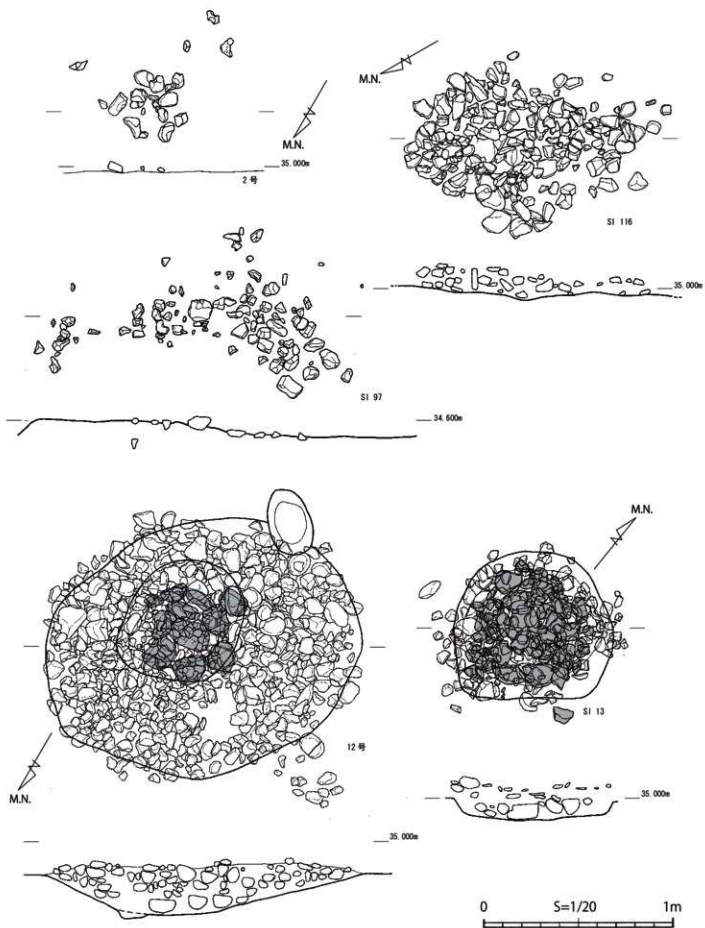
底面に向かって狭くなる土坑を伴い、規模も大きくⅢa群に類似するが、配石を持たない。他の集石遺構では配石に使用されているような大きさの礫が上部から下部にかけて疎らに入る。

【炉穴】(第56～67図)

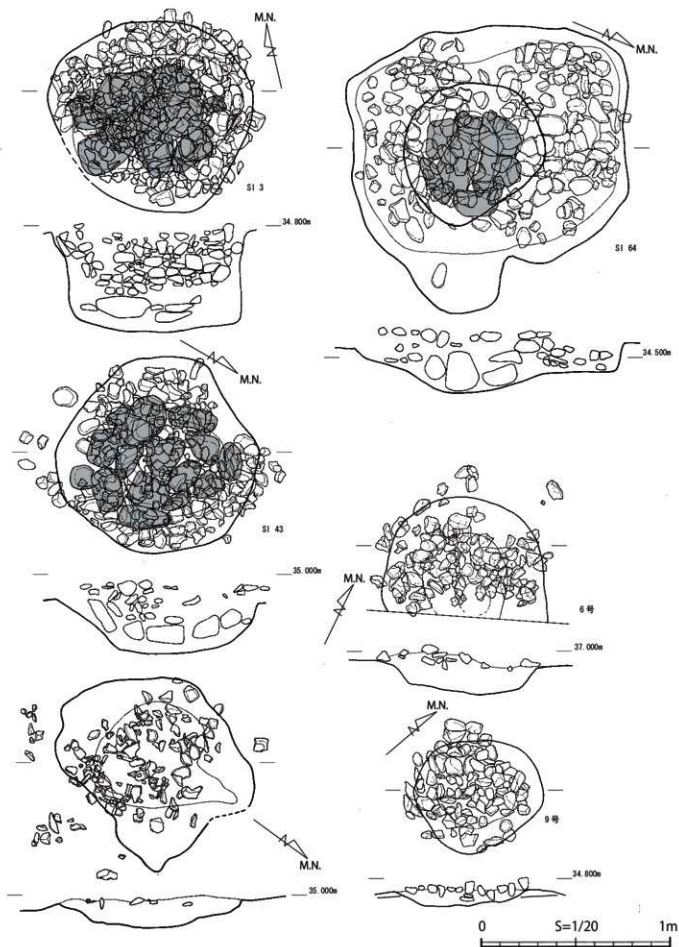
本遺跡では、F区5基、H区4基、I区8基の総計17基の炉穴を検出した。本遺跡の炉穴は、一次調査のものを含めると203基にもぼる。第1分冊で一次調査のものは報告を行っているので、ここでは分布図のみ掲載し、個別の遺構図および詳細は二・三次調査分の掲載としている。また、炉穴から出土した遺物については遺構とともに掲載している。観察表に記した出土土器の各分類基準は第3表に記したとおりである。

本遺跡の炉穴は、単独で存在するもの、切り合いにより群をなすものが見られる。分布は一次調査区を含め、台地の縁辺付近にあたる北側に多い。

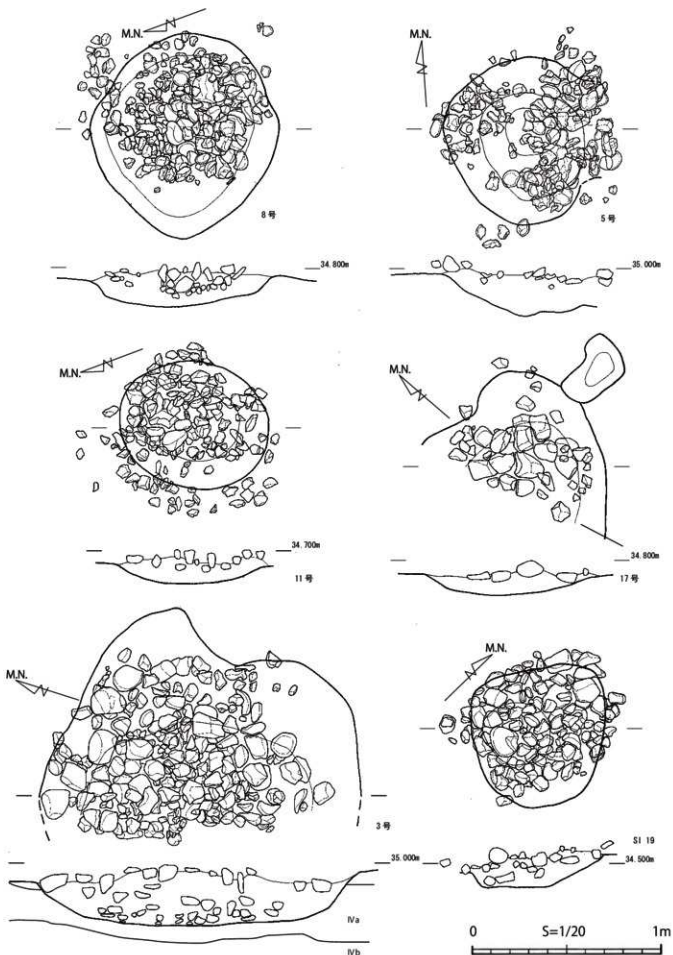
今回の調査で炉穴と認定したものは、埋土が堅くしまっており、焼土および炭化物が含まれていてさらに、底面が赤化しているものである。その中に、削った感触が地山とは若干異なる程度で、赤化面が肉眼でははっきり確認できない一群が存在する。赤化面をもつものはほとんどがVI層を底面としているが、これらはV層を底面としている。



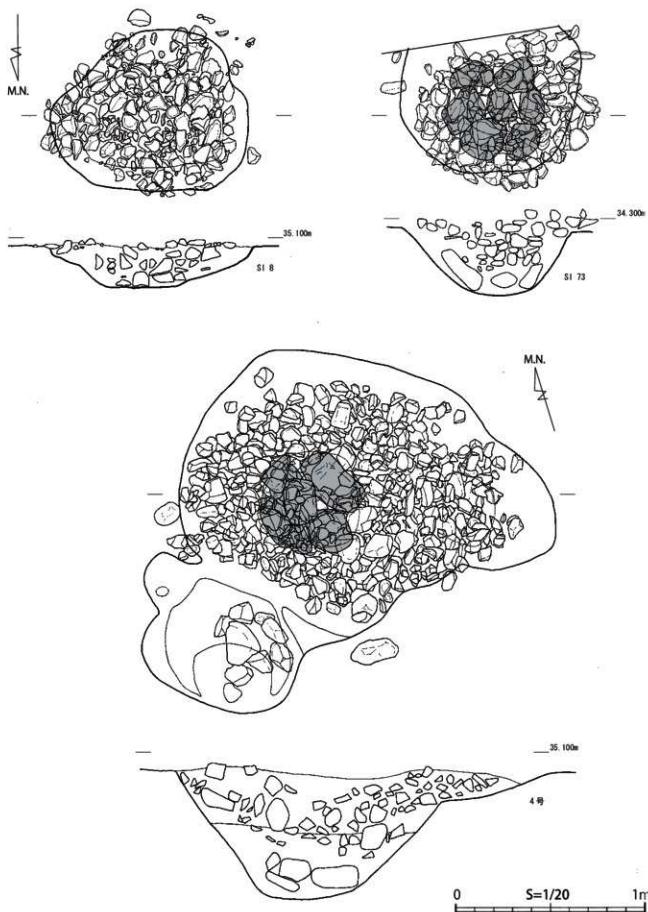
第36図 縄文時代早期集石遺構（I・II a類）実測図



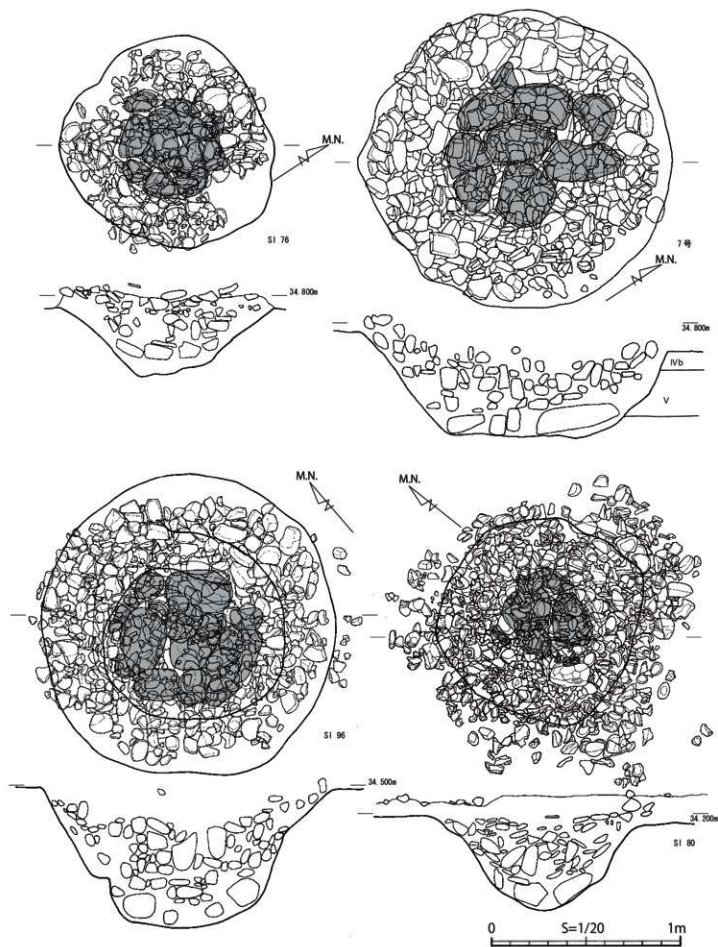
第 37 図 縄文時代早期集石遺構 (II a・II b 類) 実測図



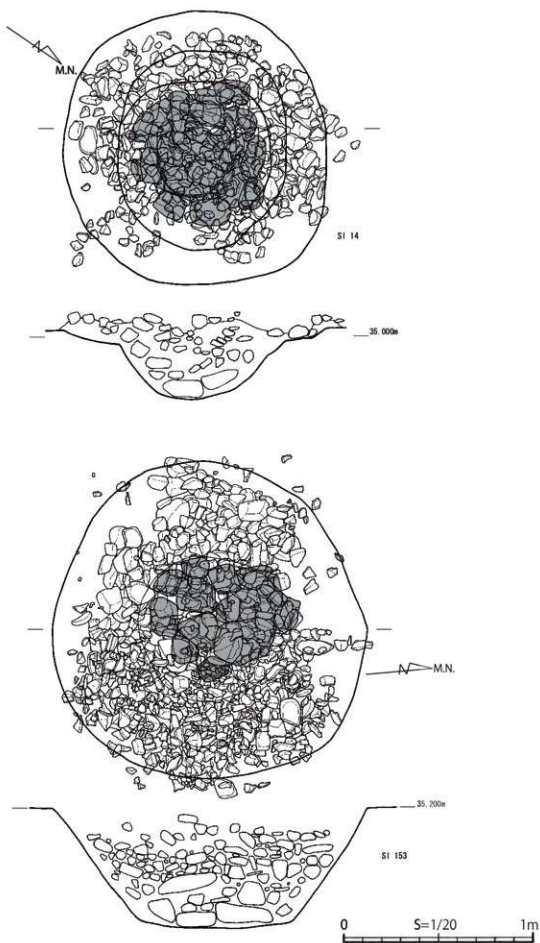
第38図 縄文時代早期集石遺構 (II b類) 実測図



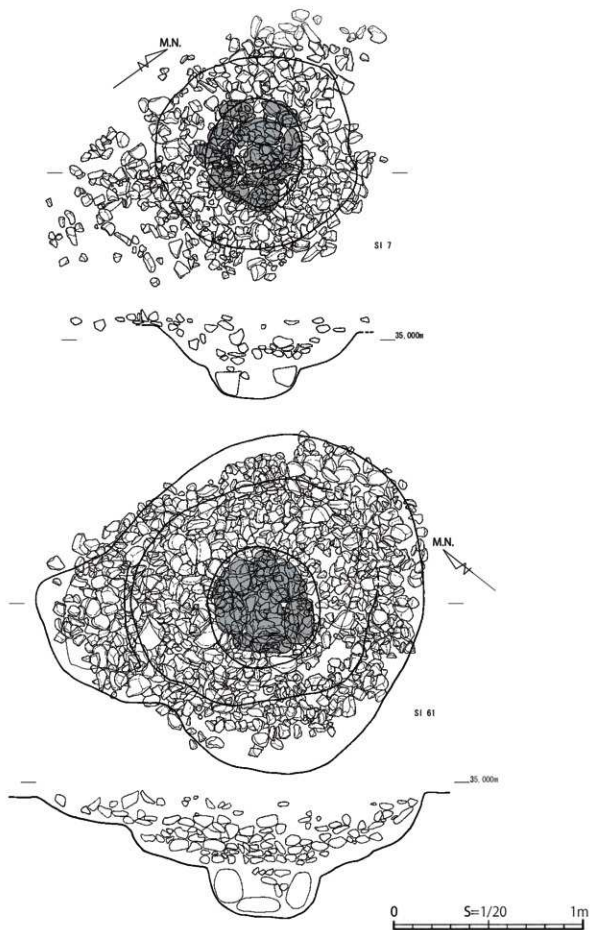
第 39 図 縄文時代早期集石遺構 (II a・III a 類) 実測図



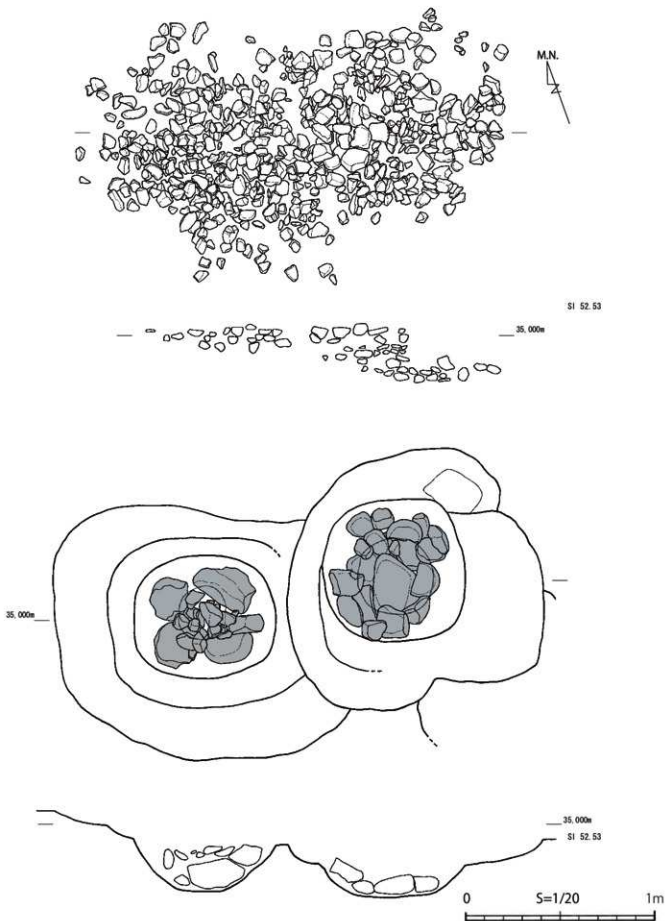
第40図 縄文時代早期集石遺構（III a類）実測図（1）



第 41 図 縄文時代早期集石遺構 (III a 類) 実測図 (2)



第 42 図 縄文時代早期集石遺構 (III a 類) 実測図 (3)



第 43 図 縄文時代早期集石遺構 (III a 類) 実測図 (4)



第44図 縄文時代早期集石遺構(Ⅲb類)実測図

しかし、埋土は非常に硬くしまり、炭化物、焼土粒を含む点では赤化面を持つ一群と酷似しており、他の土坑のものとは異なるため、明らかな赤化面が見られないものであっても、V層を底面とする炉穴ととらえているものがある(第55図1号炉穴)。

また、VI層が底面であっても、赤化面をもたないものもある。(第55・60・62図7・15・17号炉穴)

1号炉穴

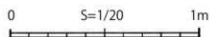
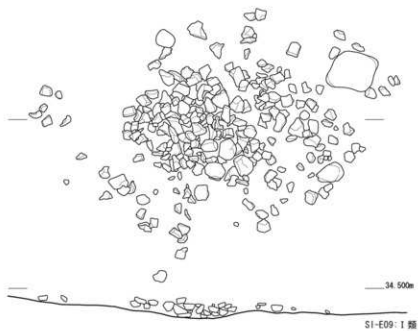
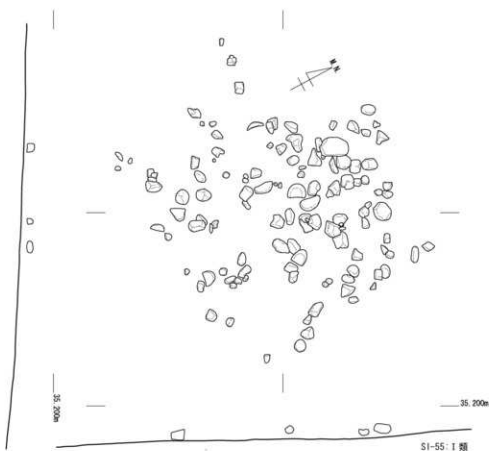
F区で検出している炉穴である。検出面はIV a層で底面はV層で、赤化面はみられない。しかし非常に堅くしまり、焼土粒を含むことから炉穴と認定した。検出時は、複数の炉穴が切り合っているかのようなプランであったが、単独の炉穴が植物による攪乱を受けていたためであった。

遺構埋土中から、181～183が出土している。181・182は、外面に縦走する楕円押型文が施文され、内面ナデ調整である。183は、口縁端部が丸く、やや外反する。外・内面ともナデ調整後、内外面ともに網目状燃糸文を施文し、内面は口縁部上端のみ、施文している。

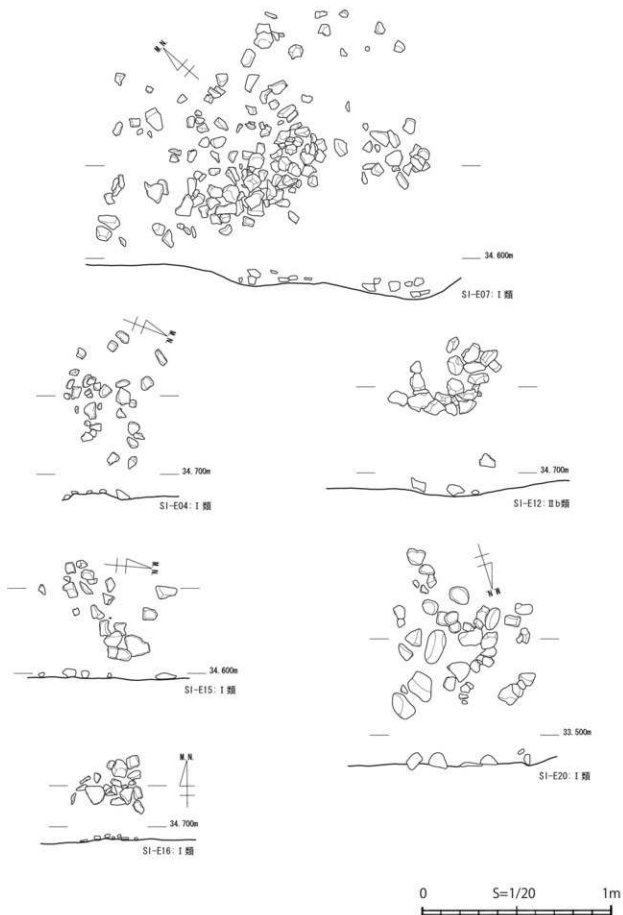
2号炉穴

F区でIV b層掘削中に検出したもので、底面はVI層である。平面形態はひょうたん形で、赤化した硬化面が一段下がって存在している。一段下がった部分には上部の埋土とは色調質感が異なる焼土ブロックとATが混ざった土が堆積している。

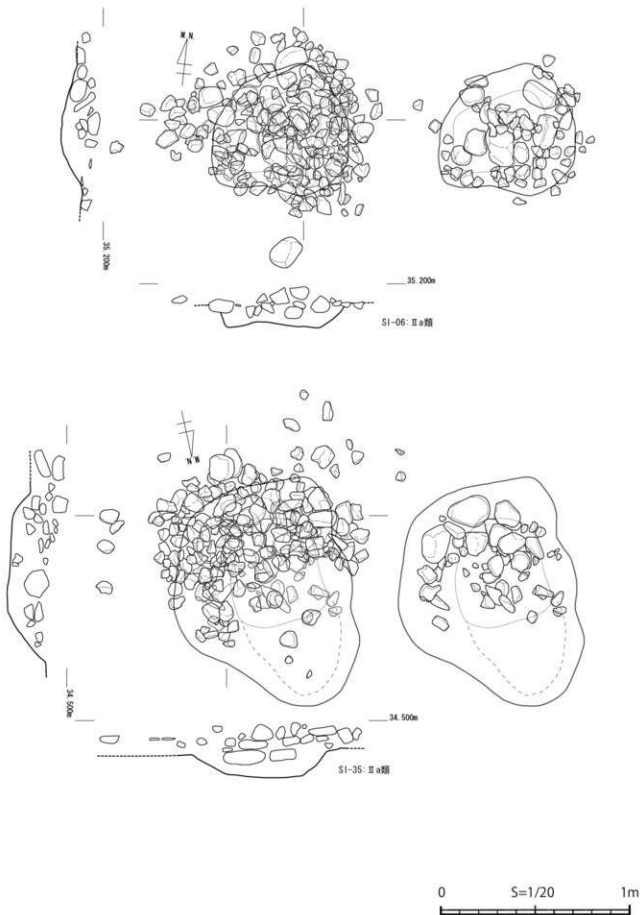
遺構埋土中から184～188が出土している。184は口唇部が尖り、外反する。内面はナデによる調整が施されており、外面には縦走する山形押型文が施文されて



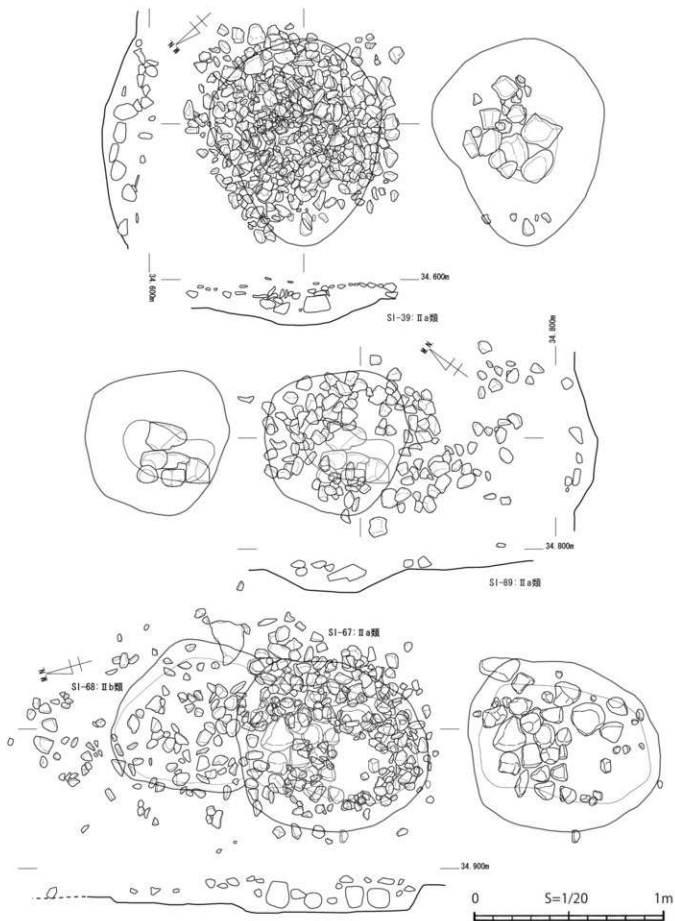
第45図 縄文時代早期一次調査集石遺構（I類）実測図（1）



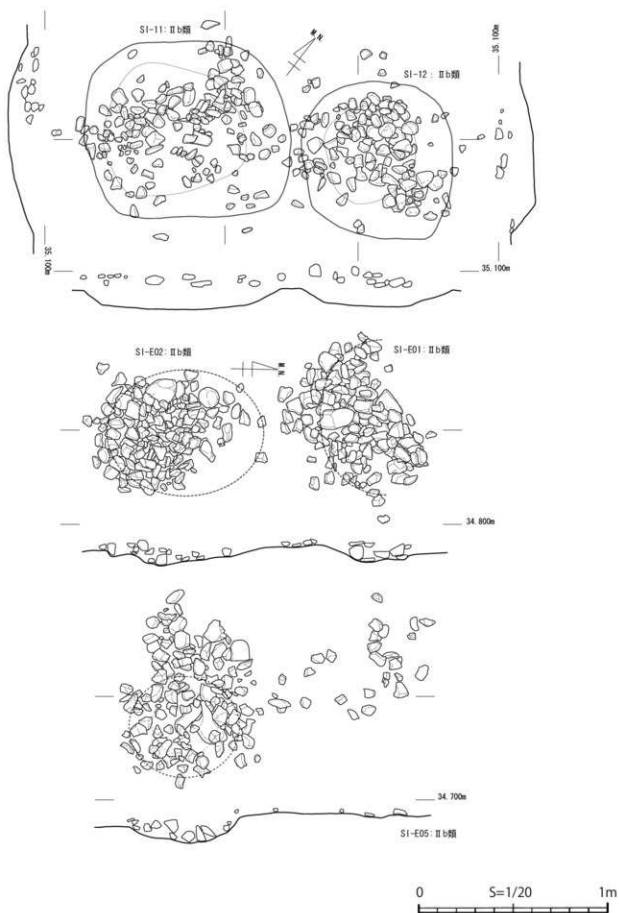
第46図 縄文時代早期一時調査集石遺構（I類）実測図（2）



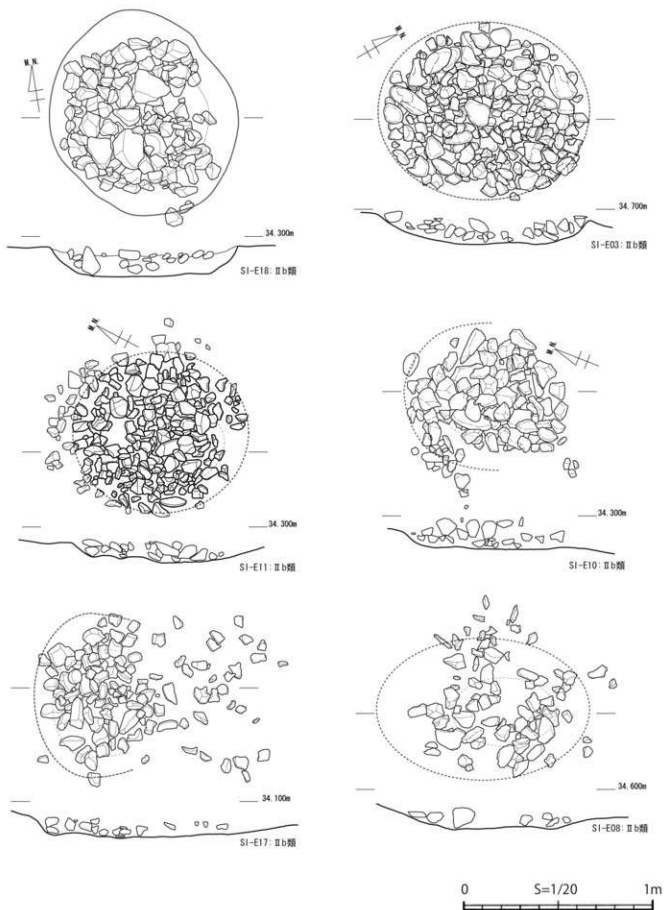
第 47 図 縄文時代早期一次調査集石遺構 (II a 類) 実測図 (1)



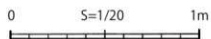
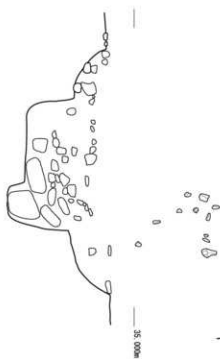
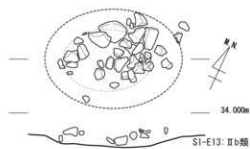
第48図 縄文時代早期一次調査集石遺構(II a・II b類)実測図(2)



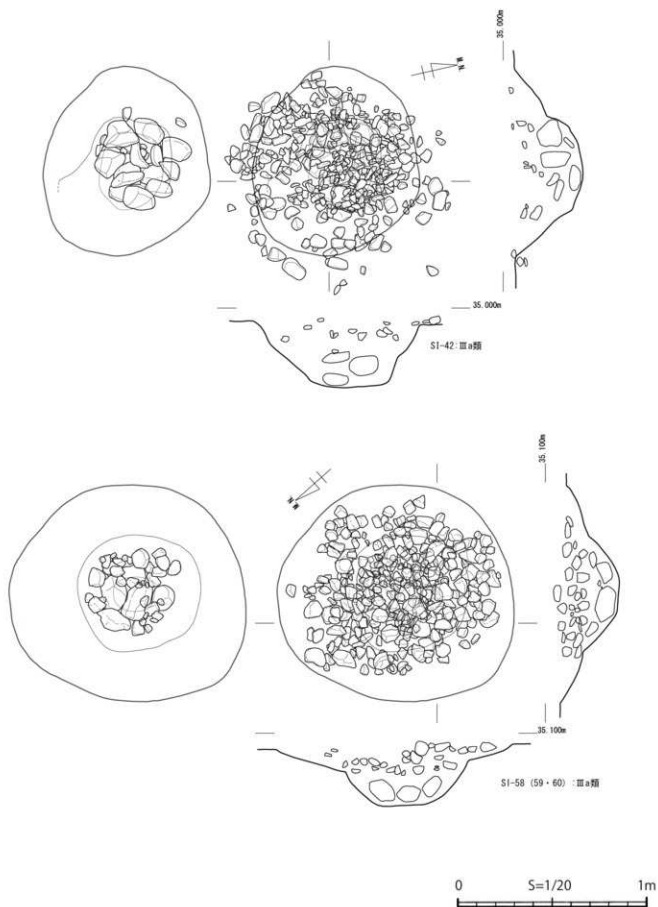
第 49 図 縄文時代早期一次調査集石遺構 (II b 類) 実測図 (1)



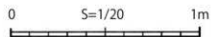
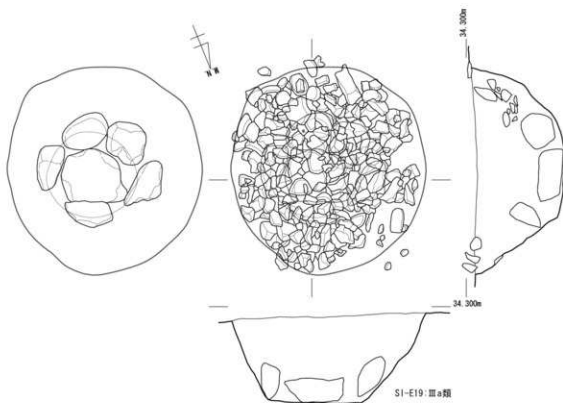
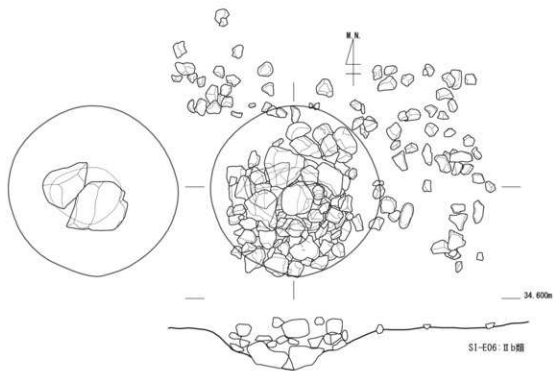
第50図 縄文時代早期一次調査集石遺構 (II b類) 実測図 (2)



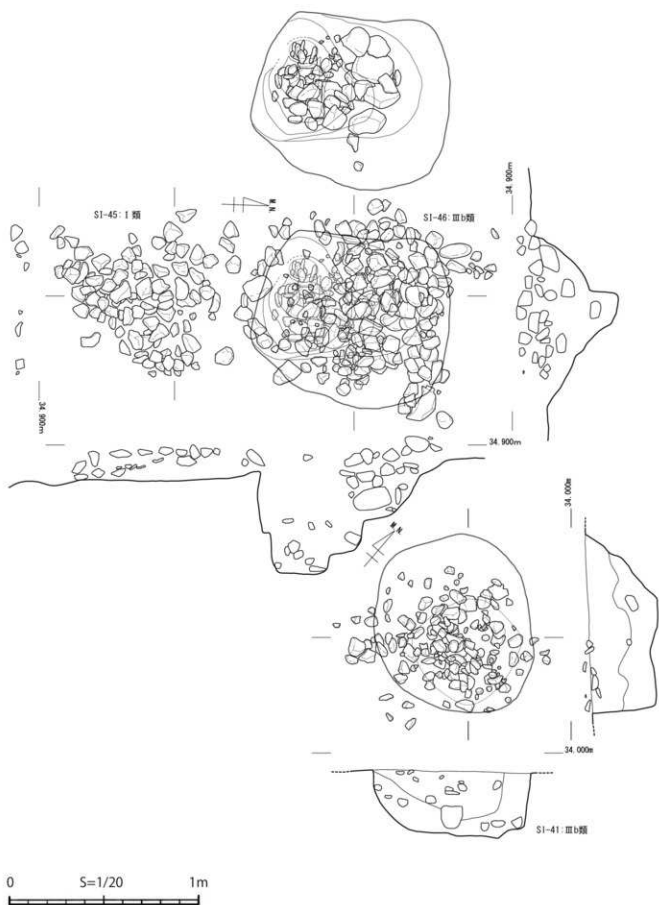
第51図 縄文時代早期一次調査集石遺構（II b・III a類）実測図



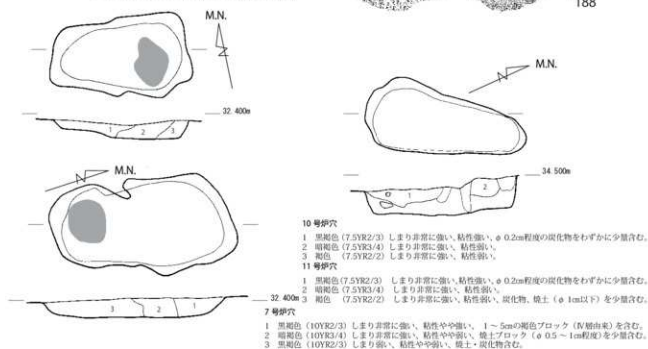
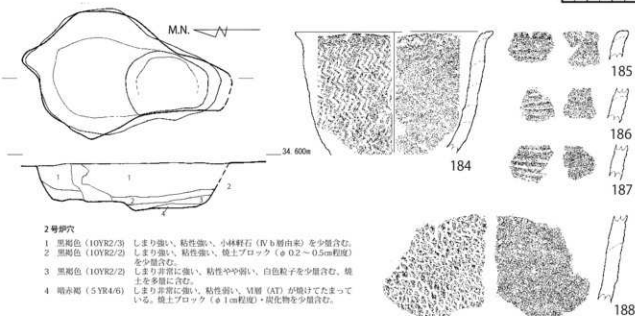
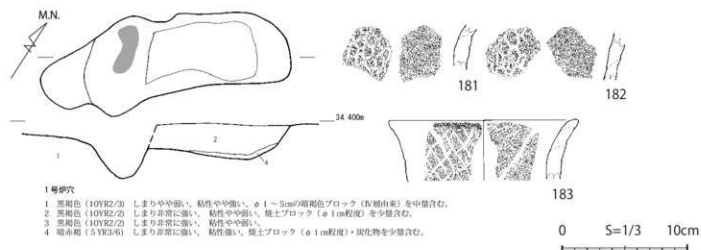
第52図 縄文時代早期一次調査集石遺構（III a類）実測図



第53図 縄文時代早期一次調査集石遺構（II b・III a類）実測図



第54図 縄文時代早期一次調査集石遺構 (I・III b類) 実測図



第 55 図 縄文時代早期炉穴・出土遺物実測図 (1)

いる。内面は口縁部上端に横走する山形押型文が施文されている。185～187は、外面に横走する貝殻条痕を施す。185の口唇部には、内側と外側に縄文を施している。188は、内面はナデによる調整が施されており、外面は斜め方向の文様が縦方向の文様に切られている。

3号炉穴

F区でIV b層掘削中に検出したもので、底面はVI層である。2号炉穴とは近接した場所に位置する炉穴である。プランは長楕円形である。赤化面は硬化しているが、はっきり認識できるほど赤く変色していない。上面には焼土粒を含む層が堆積している。

遺構埋土中から、197～202が出土している。

197は、口縁部は丸く、やや外反する。内面は、ナデ調整後、さらに口縁上端部から斜め方向に強いナデ調整が施されている。198は、外側に向かって口唇部を継ぎ足し、フック状にしている。内面はナデによる調整、口唇部に横走する山形文が施され、外面は縦走する楕円押型文を施している。

199～202は内面がナデによる調整、外面に縦走する楕円押型文を施文している。202の文様は小粒で器体も小さい。

4号炉穴

SA 8の周辺を掘削中検出した炉穴である。埋土が非常に堅くしまっていた。焚き口と思われる赤化面はやはり硬化しており、その上に焼土を多く含む層が堆積している。

遺構埋土からは、189～196が出土している。

189・190・192・196は縦走する楕円押型文を施文する胴部である。内面はいずれもナデによる調整を施している。

193・194は外面に横走する粗大な楕円押型文を施文する。いずれにも繊維痕がみられる。193は、丸く、やや外側に反る口縁部である。195は、外面に縦・斜走する楕円押型文を施し、一部文様をナデ消している。内面はナデによる調整を施している。191は、内・外面はナデ調整であるが、風化しており、不明瞭である。口縁は波状になっており、他の資料とは、性格を異する小型の鉢である。

5号炉穴

F区の北端で二次調査の最後に検出した炉穴群である。一部町の水道管によって削平を受けているがアレーバ状に広がり、赤化面が4箇所確認できた。少なくとも4基が切り合う炉穴である。各炉穴の先後関係は土層からは判断できなかつたため、もとは一基であった炉穴を上げたものであつた可能性が高い。

遺構埋土からは、208～213が出土している。

208・209は外面に斜走する楕円押型文を施す口縁部である。内面に口縁端部から斜め方向に強いナデによる調整を施している。この2つは同一個体の可能性が高い。210は外面に穿孔の痕跡があるが、貫通はしていない。212～213は、縦走する楕円押型文と、斜走するものが施文されている胴部である。内面はナデによる調整が施される。いずれにも見られる特徴であるが、筋状の繊維痕が見られる。特に213は、土器の混和材として、筋状の植物（マツか?）を混ぜ込んだものが、拡散せず束状になったものが表面に現れ、痕跡として残っているものであろうか。今回の報告では、確実な同定まではできなかつたが、川南町の尾花A遺跡（文献7）でも似たような筋状の痕跡が見られることも含め、今後検討していきたい。これらは同一個体である。

6号炉穴

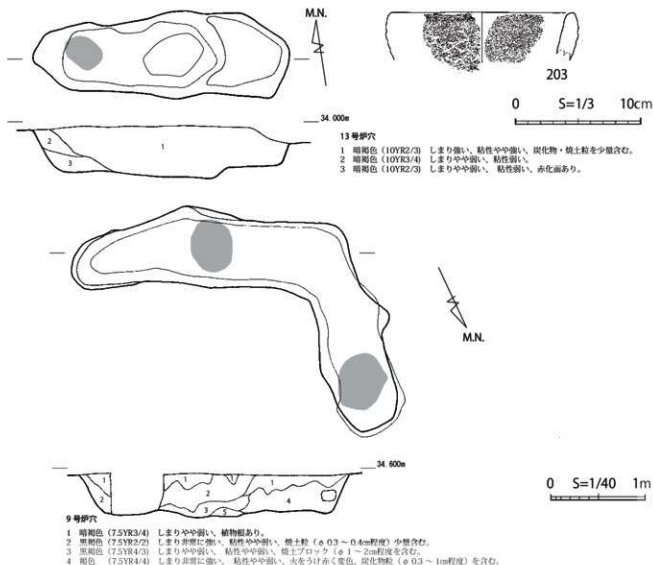
H区調査区南際で検出した炉穴群である。一部一次調査区であるE区に延びているが、調査時には確認できていないため、全容は不明である。

底面はVI層であり、赤化面は2箇所確認できているので2基以上が切り合っているものであろう。

H区の炉穴の埋土は堅くしまるが、色調がIV a層とよく似ていたため、IV b層以下の明るい土まで下げなければ検出は難しかった。

7号炉穴

H区南際で検出した炉穴である。かろうじてE区の境目で全体が検出できた単独のものである。底面はVI層であるが、明確な赤化面は確認できなかつた。しかし、埋土は6・8・9号炉穴などと同様に非常に堅くしまり、焼土粒、炭化物を含むことから同一のものとみなし炉穴と認定している。



第56図 縄文時代早期炉穴・出土遺物実測図(2)

8号炉穴

H区調査区南際で検出した炉穴群である。6号炉穴同様、一部一次調査区であるE区に延びているが、調査時には確認できていないため、全容は不明である。

底面はVI層で赤化面が一箇所確認できている。

9号炉穴

H区東側で攪乱の断面から見つけ、検出した炉穴群である。2基の炉穴が切り合ったようなL字型のプランである。先後関係は土層から確認できていないため、同時に開いていた可能性が高い。赤化面は2箇所確認できているが、単独の炉穴よりも硬化せず赤化の度合いが低い。

10号炉穴

I区の北東樹木植栽部分でかろうじてA T層が残っ

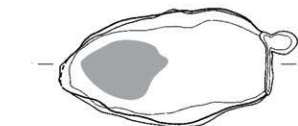
ていた部分で検出した単独の炉穴である。検出した時にはすでに底面近くまで削平されていたため、浅いものである。赤化面は明瞭であった。

11号炉穴

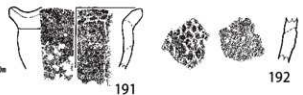
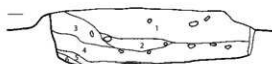
10号炉穴同様I区の北東側樹木植栽部分でかろうじてA T層が残っていた部分で検出した単独の炉穴である。やはり、削平を受けているため浅い。赤化面は明瞭であった。

12号炉穴

I区東端で検出した炉穴である。樹木植栽部分ではなかったためIV層以下の堆積状況は良好であった。検出面はIV a層であり比較的残存している炉穴である。明瞭な赤化面は1箇所確認している。

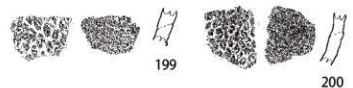
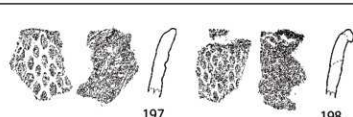


M.N.



4号伊穴

- 1 黒褐色 (10YR2/3) しまり非常に強い、粘性強い、焼土粒子ごく少量含む。
- 2 黒褐色 (10YR2/2) しまり非常に強い、粘性強い、1とよく似るが若干色調が明るい。
- 3 暗褐色 (10YR3/3) しまり非常に強い、粘性やや弱い、炭化物粒少量含む。
- 4 黒褐色 (10YR2/2) しまり非常に強い、粘性強い、M層 (AT) が残っていたまっている。焼土ブロック (φ 1cm程度)・炭化物を少量含む。
- 5 暗褐色 (10YR3/3) しまりやや強い、粘性強い、焼土粒子少量含む。
- 6 暗褐色 (10YR3/3) しまり強い、粘性強い、焼土ブロック (φ 2~3cm程度) 多量に含む。



M.N.



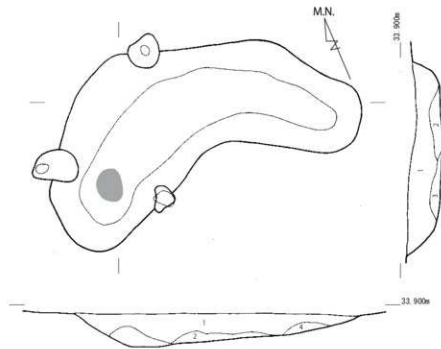
3号伊穴

- 1 黒褐色 (7.5YR3/3) しまり非常に強い、粘性やや弱い、植物筋あり。
- 2 黒褐色 (7.5YR2/2) しまりやや強い、粘性やや強い、炭化物粒 (φ 1~2cm程度)。
- 3 黒褐色 (7.5YR2/2) しまりやや強い、粘性やや強い、土ブロック (φ 1~2cm程度) を含み赤みがある。
- 4 暗色 (7.5YR4/4) しまり非常に強い、粘性やや弱い、炭化物粒を少量含む。
- 5 暗褐色 (7.5YR3/3) しまりやや強い、粘性強い、焼土ブロック (φ 0.1~0.2cm程度) を少量含む。
- 6 暗褐色 (7.5YR3/4) しまり強い、粘性強い。

0 S=1/40 1m

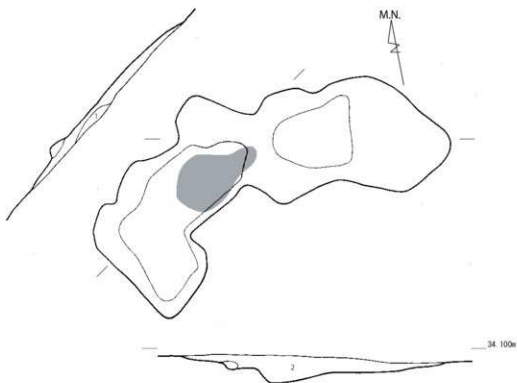
0 S=1/3 10cm

第57図 縄文時代早期炉穴・出土遺物実測図(3)



12号炉穴

- 1 暗褐色 (10YR3/4) しまりやや弱い、粘性弱い、植物根あり。
- 2 暗褐色 (7.5YR3/4) しまり非常に強い、粘性弱い。
- 3 暗褐色 (10YR3/4) しまりやや強い、粘性弱い、 ϕ 0.5cm以下の焼土粒をわずかに含む。
- 4 暗褐色 (10YR3/4) しまりやや弱い、粘性弱い、 ϕ 0.5cm以下の焼土粒・炭化物粒をわずかに少量含む。



14号炉穴

- 1 暗褐色 (7.5YR4/4) しまり非常に強い、粘性弱い、 ϕ 0.2cm程度の焼土粒・炭化物粒をわずかに含む。
- 2 暗褐色 (10YR2/2) しまり非常に強い、粘性弱い。

0 S=1/40 1m



第 58 図 縄文時代早期炉穴実測図

13号炉穴

1区で検出した炉穴である。プランは長楕円形であるが、赤化面は東西方向で2箇所確認されている。少なくとも2箇所を焚き口として使用していたことは確かであるが、それが同時期なのか、明確な時期差があるのかは、土層からは判断できなかった。

遺構埋土中から203が出土している。外面に横走する楕円押型文を施し、内面はナデによる調整を施している。口縁部は丸く、やや内彎する。小型の鉢である。

14号炉穴

1区残存部北端で検出した炉穴群である。逆L字型のプランからすると2基以上の遺構が切り合っていると想定できるが、赤化面は中央部に1箇所しか確認できていない。

しかし、もともとは単独の炉穴であったものが、なんらかの理由で機能しなくなったため、焚き口をはさんで逆方向からも土坑を掘れば、最終的にはこのようなプランになる。また、底面に不自然な段差がついていることから複数の遺構の切り合いを想定することは可能である。

15号炉穴

1区残存部東端で検出した炉穴群である。この炉穴群は、検出時に焼土面が確認されたが、炉穴に伴うものかどうかは不明である。底面はVI層であるが、明確な赤化面は見られなかった。南側には風倒木による層位逆転がみられた。

遺構埋土中から、204～207が出土している。いずれも外面に縦走する楕円押型文を施し、内面はナデ調整である。

16号炉穴

1区残存部中央で検出した15号集石遺構に中央部分を切られた炉穴である。赤化面は2箇所確認できているが、いずれも不明瞭である。土層からは2基以上の切り合いは認められなかった。

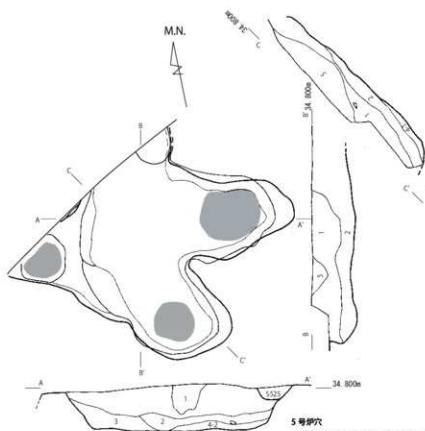
遺構埋土中から214・215が出土している。214は外面に楕円押型文を施した後、文様が帯状になるように、部分的に文様をナデ消している。内面には口縁部上端のみ横走する楕円押型文を施す。215の外面も214と同様で、帯状に文様がナデ消されている。

17号炉穴

1区残存部南端で検出した炉穴群である。ただし、2基は切り合っておらず、1基の集石遺構によって最終プランがつながったものである。各炉穴は単独のものであり、それぞれ赤化面は確認できていない。

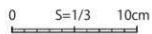
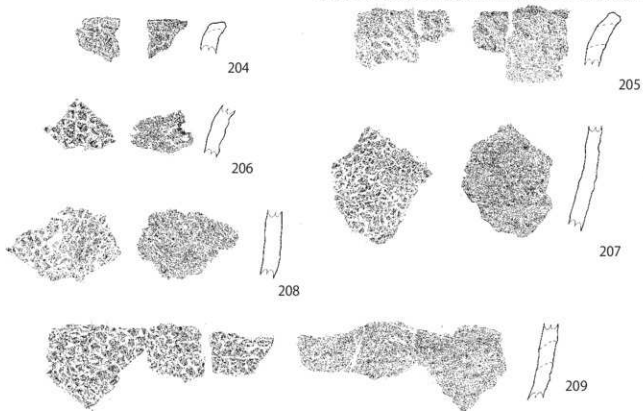
遺構埋土中から、216～219が出土している。すべて同一個体の可能性が高い。16号集石遺構で出土した214と同様、外面の文様はベルト状に残る。内面は口縁部上端のみ横走する楕円押型文を施す。

219は底部付近まで残存する資料である。底部が近くなると、施文をやめ、ナデによって調整を施している。

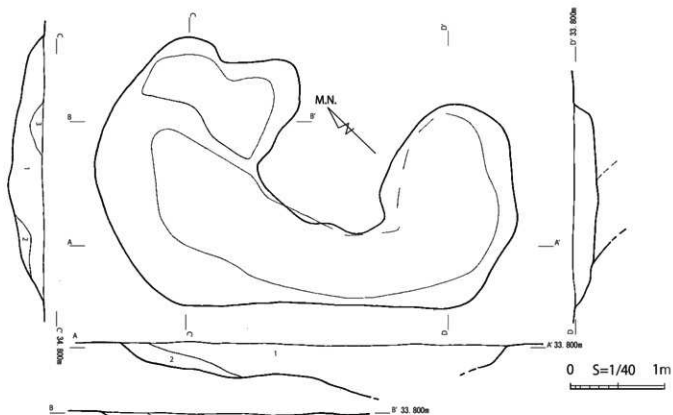


5号炉穴

- 1 黒褐色 (10YR2/3) しまり非常に強い、粘性強い、炭化物粒・焼土粒ともに少量含む。
- 1-2 色調・質感ともにIV・Vとよく似る、ブリッジもしくは壁面の崩落土か?炭化物含む。
- 3 暗褐色 (10YR3/3) しまりやや強い、粘性やや強い。
- 4 赤褐色 (5YR2/6) しまりやや弱い、粘性やや強い、焼土を多量に含み赤みがかかっている。
- 5 黒褐色 (10YR2/3) しまり非常に強い、粘性強い、V層 (AT) ブロック、炭化物粒、焼土粒含む。

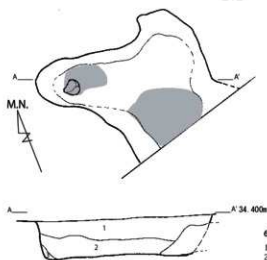
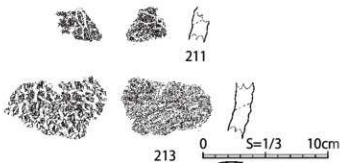
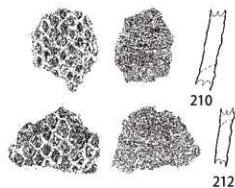


第59図 縄文時代早期炉穴・出土遺物実測図(4)



15号炉穴

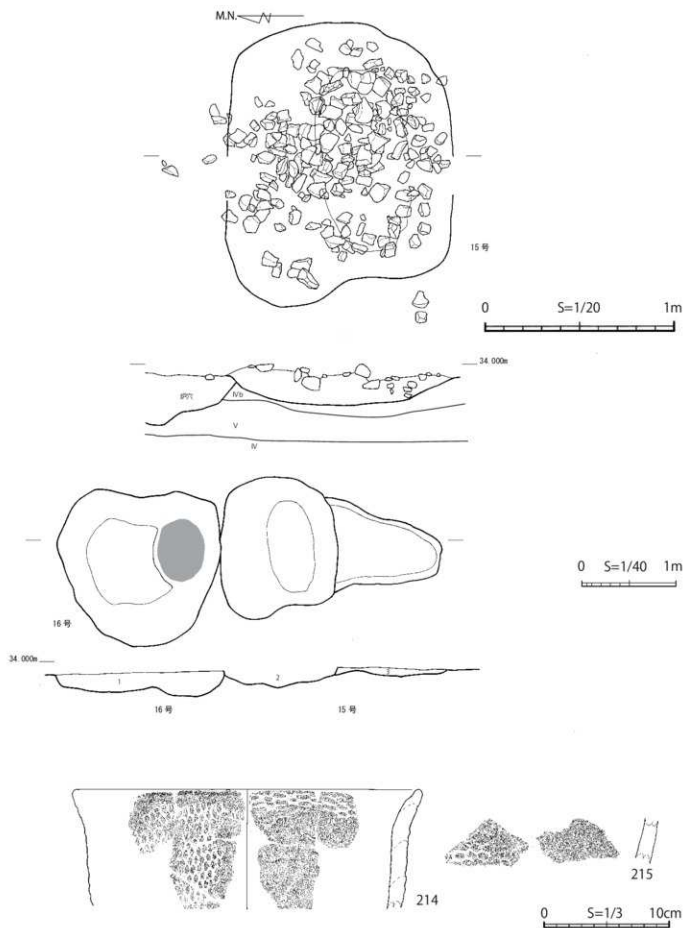
- 1 暗褐色 (10YR2/3) しまり非常に強い、粘性弱い。
- 2 暗褐色 (10YR3/4) しまり非常に強い、粘性弱い。
- 3 暗褐色 (10YR2/3) しまり非常に強い、粘性弱い、φ0.2cm程度の焼土・炭化物較わずかに含む。



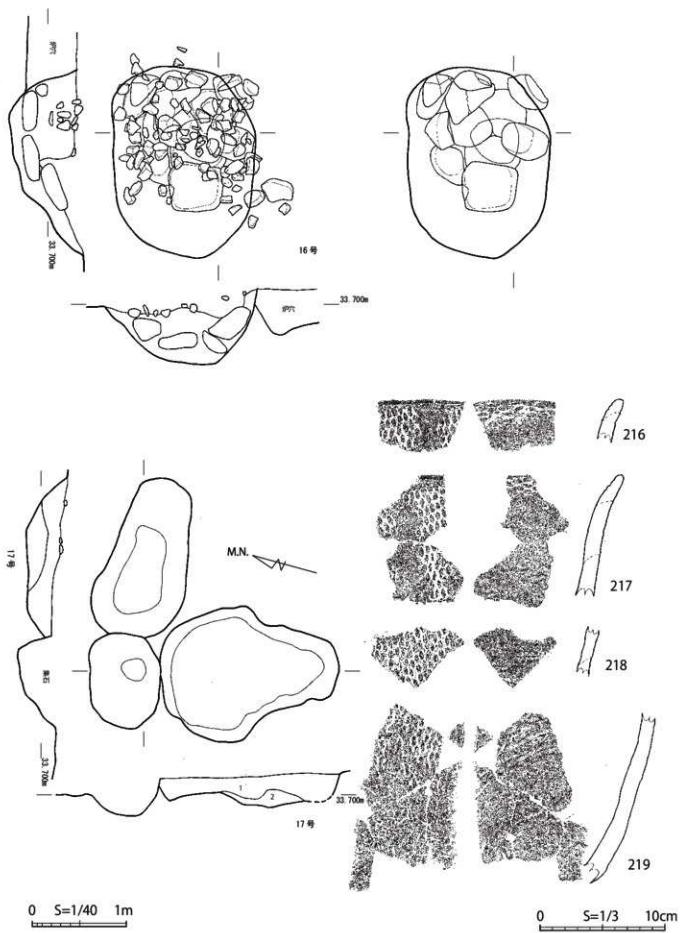
6号炉穴

- 1 暗褐色 (10YR3/4) しまり非常に強い、粘性弱い、φ1~5cmの褐色ブロック (N層由来) を含む。
- 2 暗褐色 (10YR3/4) しまり非常に強い、粘性弱い、焼土ブロック (φ0.5~1cm程度) を少量含む。
- 3 褐色 (10YR2/3) しまり弱い、粘性やや弱い、壁面が崩落したものか?

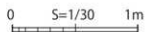
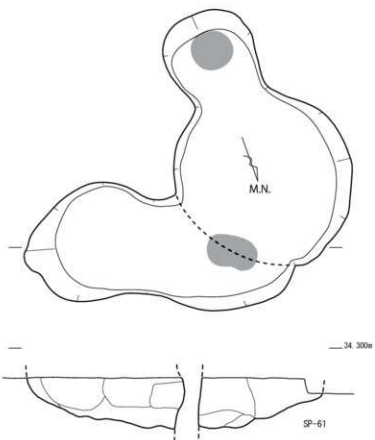
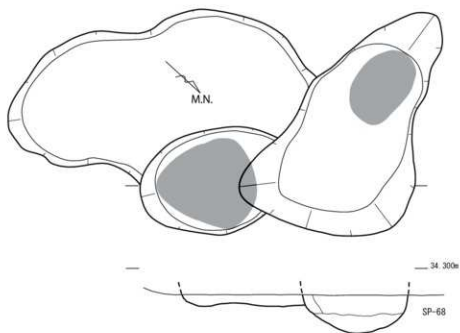
第60図 縄文時代早期炉穴・出土遺物実測図(5)



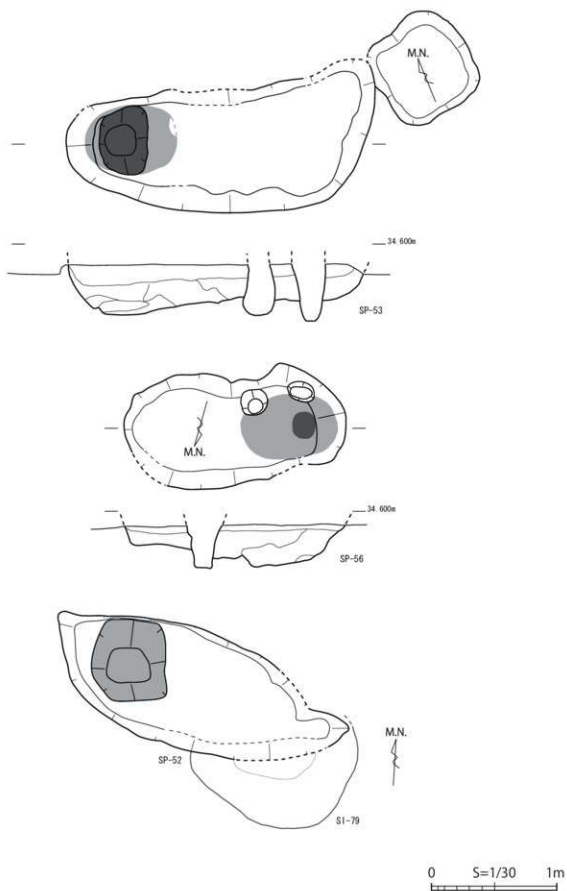
第 61 図 縄文時代早期炉穴・出土遺物実測図 (6)



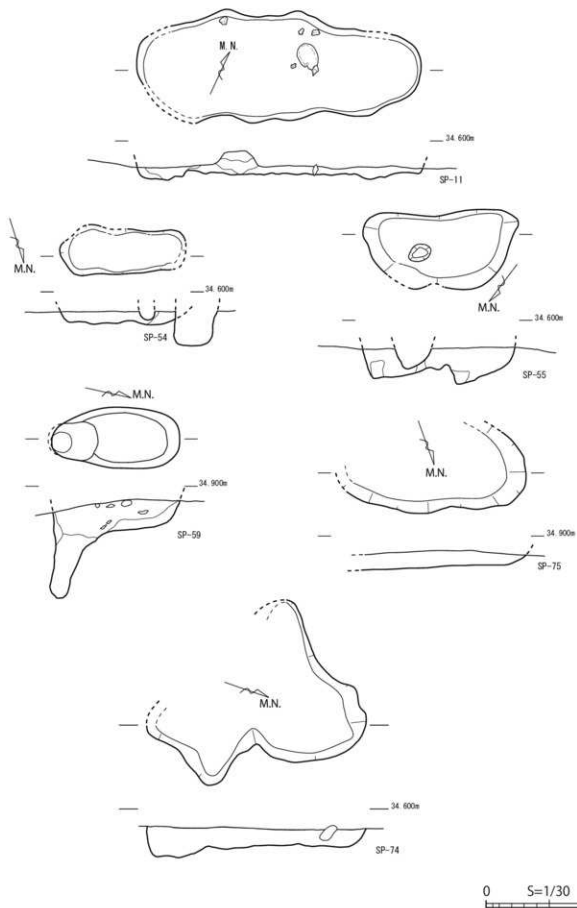
第 62 図 縄文時代早期炉穴・出土遺物実測図 (7)



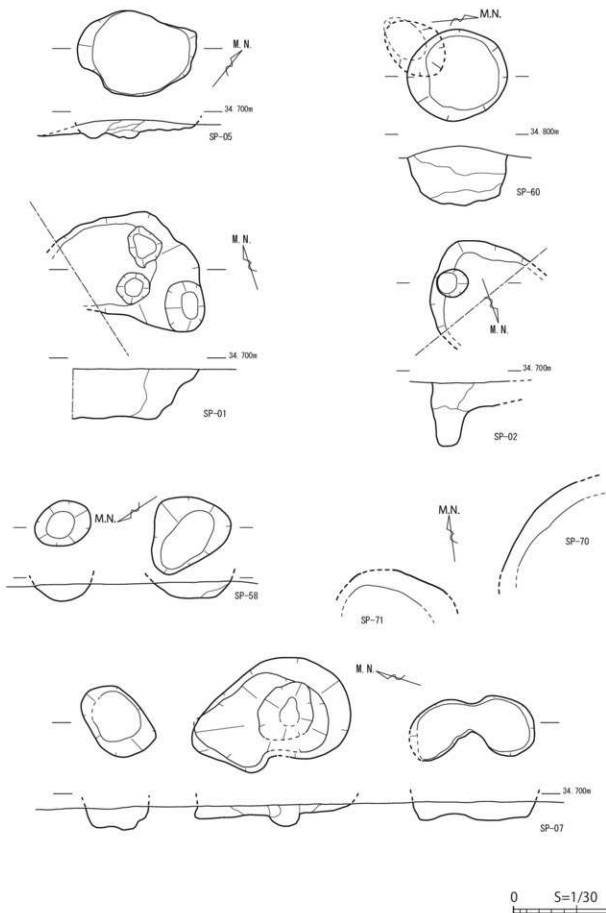
第 63 図 縄文時代早期一次調査炉穴実測図 (1)



第 64 図 縄文時代早期一次調査炉穴実測図 (2)



第 65 図 縄文時代早期一次調査炉穴実測図 (3)



第 66 図 縄文時代早期一次調査炉穴実測図 (4)